

## 住様式に関する研究

## 一床面様式と起居様式—

扇田 信 西村 一郎  
今井 範子

## 目 次

- I 畳生産の動向
  - 1-1 いぐさ生産の時代的推移
  - 1-2 畳床生産の時代的推移
  - 1-3 「化学畳」の生産と使用動向
  - 1-4 畳の流通経路
  - 1-5 高くなった畳
- II 床面様式と起居様式
  - 2-1 最近の住宅における「洋室化」傾向
  - 2-2 起居様式・床面様式の現状と要求傾向
  - 2-3 居住者の畳に対する指向性
- III 床面様式・起居様式の将来への展望と問題点

## 研究目的・本論の構成

住様式に関する諸問題のなかで、ここではおもに床面様式と起居様式についての調査研究の結果を報告する。

この問題をとりあげた理由は、つぎのようなことによる。

最近の都市住宅あるいは農村地帯の住宅においてさえも、平面計画の室構成をみると畳部屋の比率が減少する一方で、板間あるいは「じゅうたん仕上げ」などいわゆる「洋室化」の傾向が顕著にみられる。また畳床<sup>ゆか</sup>にもじゅうたんの使用がはなはだ多い。

一方これと並行して坐位の生活様式つまり起居様式の面でも、全般的に床坐から椅子坐への発展がみられ、しいていえば畳を残すところは主寝室あるいは座敷あるのみという感すらある。その場所もふとん夜具がベッドに移行する傾向が感じられる（調査継続中）。

このような傾向は、にわかに始まったわけではないが、戦後徐々に進展しながらとくに成長経済後急速に変貌し最近に至って一種の曲り角にきているようである。つまり、このまゝつき進むのか、畳は残るのか、あるいは複合した発展を示すのか。

しかし事実のこのような進行とは逆に、意識としては畳への愛着性はひじょうに根強いものがある。

このような住様式の変貌、あるいは現実と意識との見かけ上の矛盾は、それ自体住まいのあり方として検討する意義があるが、住宅計画の考え方にも大きな影響を与える問題である。以上が本研究にとりくんだ理由であり、現状の明確な把握を通して今後の方向を探ろうとするこ

とが研究の目的である。

なお本論は、畳の生産面についての報告と居住者側の住宅および意識調査の報告の2部からなっている。

なぜなら床面の居住様式の変貌については、単に住宅供給者ないし居住者の様式指向だけが決定要因ではなく、床面材料とくに畳の供給事情の動向が大きな影響をもつであろうと考えたからである。

なお居住者については後に示すような規模・地域・新旧の住宅階層を選定した。

## 調査対象・期日等

## ■ 畳生産事情に関する調査 ■

- いぐさ・畳表生産に関する聴きとり調査及び資料収集
  - ・岡山県農林部農産園芸課／岡山市農林部農政課／岡山市一宮支所／いぐさ田・生産農家／畳表製織農家／緒目製造業者（1977年7月）
  - ・倉敷市経済局農林課／畳表・花筵製造卸業者（1977年7月）
  - ・熊本県農政部特産奨励課／熊本県経済連い業部市場課（1977年9月）
- 畳製造業者聴きとり調査
  - ・京阪神・岡山畳製造業者（1977年7月）
- その他関係諸団体への資料収集及び聴きとり
  - ・農林省農蚕園芸局／建材試験センター／日本住宅公団総合試験場／通産省窯業建材課／建設省住宅生産課／日本住宅公団調査研究課・量産課
  - ・全日本畳組合連合会／近畿畳商工業協同組合等

## ■ 居住者調査 ■

## ■ 調査対象の選定

関西における主要住宅供給会社＜中規模分譲住宅供給会社（数社）・小規模建売住宅供給会社（数社）・マンション設計施工会社（数社）＞に対するプラン動向調査をふまえ、研究目的にそって表1に示す調査対象を抽出選定、調査した。これら都市住宅に対し、地方的特色あるいは伝統的特色をもつものとの比較という意味から、山形市近郊の住宅、奈良県橿原市今井町の町家を調査対象として加えた。

調査の方法は、調査票を留め置きし、聴きとり調査を適宜併用した。

表1 調査対象の概要

| 調 査 対 象                  | 有効回収数 |     | 調査期日      |
|--------------------------|-------|-----|-----------|
|                          | 世帯票   | 個人票 |           |
| 小規模建売住宅<br>(京阪間住宅地2地区)   | 167   | 288 | 1977年 11月 |
| 中規模分譲住宅<br>(京阪神奈間住宅地3地区) | 225   | 426 | 同 上       |
| 注文住宅<br>(京阪神奈間住宅地3地区)    | 134   | 268 | 同 上       |
| マンション<br>(阪神間2地区)        | 141   | 235 | 1978年 11月 |
| 山形建売分譲住宅<br>(山形市近郊住宅地)   | 99    | 100 | 1978年 7月  |
| 山形農村住宅                   | 88    | 80  | 1978年 8月  |
| 今井町町家<br>(奈良県橿原市)        | 121   |     | 1978年 7月  |

## I 畳生産の動向

畳生産の動向を現象的に追うだけでも、その年次的変化のなかに大きく移り変る社会的条件の影響を看取することができる。

さらに上記の動向に直接働きかけている要因、あるいは生産の隘路となっている問題点をいくつかあげてみる。

### 1-1 いぐさ生産の時代的推移

畳はいうまでもなくいぐさを編んだ畳表とその台ともいべきわら床からできているが、この両者の原材料つまりいぐさとわらの生産事情に時代的な変化が大きくあらわれている。

図1は、二種類のいぐさ生産量の全国的推移をみたものであるが、いぐさ栽培に特有の3年を周期とする高低の山と谷を示しながらも、敗戦直後1～2年のほとんど零に近い生産量は昭和26～7年あたりから急速に上昇し、高度成長経済を軌を一ツにして38～9年には最高点に達している。しかしその後オイルショックによる一時的低迷は考えられるものの、頂点のカーブは低落の一途をたどりつつあるのが現状である。

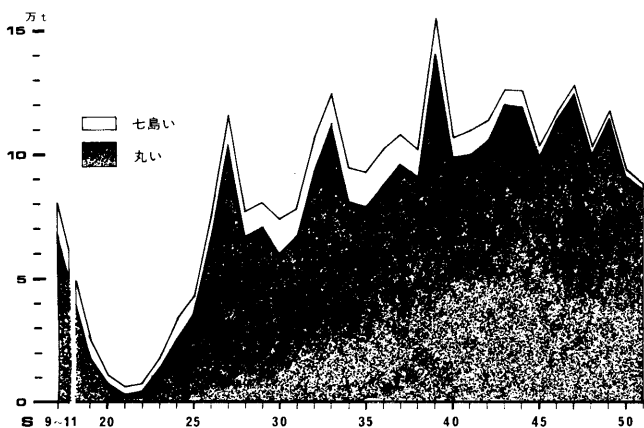


図1 いぐさ生産量の年次推移

この事情をいさしくわしく検討するために、主要生産地別に見てみると図2のようになる。いぐさといえば岡山と考えられた銘産地も昭和42～3年以後は熊本にとってかわられている。

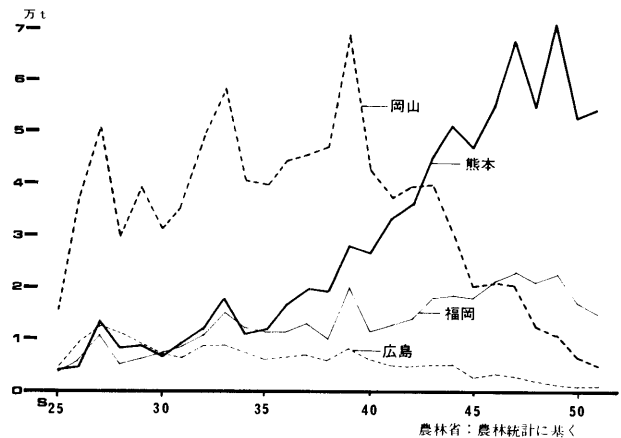


図2 主産県別いぐさ生産量の年次推移

その理由はいろいろ考えられるが、直接的なものをあげると、

いぐさ生産の労働力の減退である。いぐさ生産は農業収益の面では果実を凌いで最高である。しかし寒冷期の植付け・栽培から泥染めをして製品化する過程の労働は相当苛酷である。若年層のこれに対する労働意欲がうすれてきたこと。宅地開発による畑地そのものの減少もあげられる。

そしてこれらの背景に、巨大な水島工業コンビナートの開発がある。それは周辺農村地帯の宅地化を急速に促進し、また農村の労働力を吸収することになった。

宅地化による水質汚染、大気汚染は、いぐさの「さきがれ現象」を地域的には生ぜしめている。

以上のような諸理由が、岡山一帯のいぐさ生産を転落させ、それにかわって農業界の色彩をなお強く残し、かつ、従来からいぐさ生産の歴史ももつ熊本を第一位に押し上げたものであろう。しかし熊本のいぐさは従来から産出されていたものの、気候、土壌の関係から品質的に岡山ほど上質でない。その改良のために岡山の土壌を輸送することもあるという。

しかしいずれにしても、現代いぐさ生産に種々の問題が生じつつあり、全国的には生産が下降方向をむいていることはいふまでもない。

生産面独自の理由と同時に、需要の側からの理由も推測される。図3は、いぐさ生産量と住宅の「総畳数」との年次的推移を見比べてみたものである。たゞしこの「畳数」は面積の表現として畳数を使っているだけで、実際に畳が敷かれているかどうかは関係がない。

これによると、47年辺りからでてる需要と生産とのアンバランスは、後章で示す価格の推移などに明らかに反

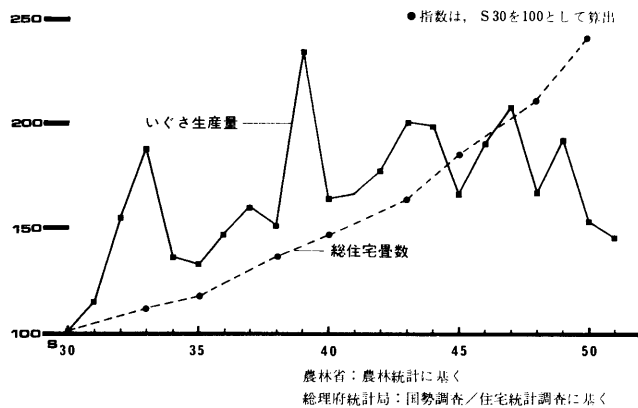


図3 いぐさ生産量と総住宅量数の推移

映していることが読みとれる。しかしもし実際に畳が使用されている率が高いとすれば、このアンバランスはもつと大きく世情に問題にされてよいはずである。そうではないのは、住宅—とくに大都市住宅の平面構成における「畳ばなれ」によって相殺されているからであろう。そして間接的にはこの「畳ばなれ」が生産面にも影響を与えるものであろうと考える。

### 1-2 畳床生産の時代的推移

畳の構成要素である畳床（タタミドコ）についても、いぐさとは生産事情の異なる特徴をもつカーブを描くものの、昭和48年以後は下降一途を辿ることは同様である。（図4）

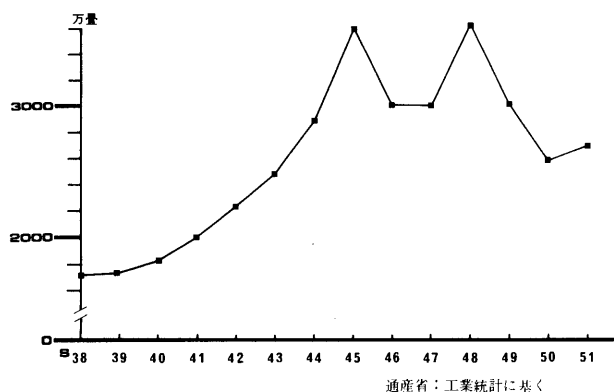


図4 畳・畳床の生産出荷量の推移

さらに図5では、その年次的推移と新築住宅着工数のそれとも重ねあわせてみたが、ここでも46年以降、両者の対応関係に明白な変化を見せてきている。

畳床の素材はいうまでもなく稲わらであるが、日本全国に水田は分布しておりながら、種々の理由から畳床用の藁は不足している。

その主要な理由は、米作農業における機械化の発展である。畳床のわらはは丈の長い強靱なものを必要とするが、現代の刈入れはコンバインによって、刈りとりつゝ短く刻んで田に撒いてしまう。つまり藁はのこらないわけである。畳業者は床用に長い藁を刈ってもらうように特定

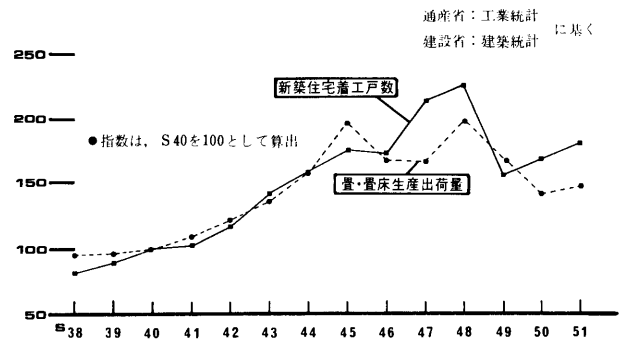


図5 畳・畳床生産出荷量と新築住宅着工数の推移

農家に依頼することもあるが、これとても面倒がつて引受けない農家が多い。

機械化の進んでいない生産地域を求めて依存をはかるものゝ、将来の保障はない。また他方では酪農振興とからんで飼料用需要との競合もある。さらに米作改良の—方向に風害等につよい短茎の品種栽培も進められている。

農業技術の近代化の方向が、畳床とは相反する方向に発展するのであるから、矛盾は深刻といわざるをえない。

したがって現在では韓国・台湾からの輸入にも依存せざるをえない状況を呈している。

また次に述べるように、フォームポリスチレン等を挿入したいわゆる「化学畳」の生産がはかられている。

### 1-3 「化学畳」の生産と使用動向

いぐさ表・わら床について、その生産面に関し、種々の問題をかかえていることを指摘してきたが、ここでそれらにかわる代替品としての化学畳について考察する。

在来はいぐさ表とわら床による畳に対し、プラスチックなどの材料を主に使用した多種の化学畳が出てきている。

#### (1) 化学表について —普及をみなかった化学表—

まず在来はいぐさ表にかわる化学表（一般的に使用されている材料はポリプロピレン）については、一時、安価であるなどの理由により、一般住宅で使用されたこともあったが、多くの欠点を有していたため、現在ではほとんど使われていない。畳業者からの聴き取りや日本住宅公団の資料（量産試験場：化学畳の性能に関する研究・その1）などに基づくと、化学表の欠点は、次のように要約される。

化学表の欠点 —化学表は畳に非ず—

- ① 感覚面での問題。いわゆる「いぐさの感触」がないこと。これは、どうすることもできぬ本質的な欠点であろう。後述するが 居住者調査において、畳の良さをささえる強い理由として、いぐさの感触があげられる。
- ② 維持管理面での問題。静電気が生じ、そのため

汚れが付着し黒ずみやすい。

- ③ 調湿性、保温性の問題。夏と冬の冷暖房時に、「冷たい」「べとつく」。

化学床は、結果的には普及しなかったのであるが、それは上記の感覚、機能両面における欠点によるものと考えられる。後述の居住者の畳に対する評価等を考え併せても、畳表は少なくともいぐさであることが望まれている。ストッキングが絹からナイロンにかわったようなメリットは、畳表の材料革命についてはいえない。

次に、現在のわら不足という状況に対しその代替材料としての化学床について述べる。

## (2) 化学床の普及

十数年前より、石油化学メーカー（旭ダウ・鐘淵化学・積水化学）が発泡スチロールの使途の一つとして畳床に目を向け、畳製造業者と協同しながら発泡スチロールをわらでサンドイッチ状にはさんだ化学床を開発、商品化してきた。

化学床の種類として、大きく二つに分類することができる。わらと発泡スチロール（フォームポリスチレン）を併用したものと、もう一つはわらを全く使わず発泡スチロールやインシュレーションボードを主体にした文字どおりの化学床がある。さらに、その構成の仕方によって多種の化学床が開発されている。畳表にはいぐさ表が使用されるので、住宅に敷き込まれると化学床かどうか外見上わからない。

さてこのような化学床の使用状況については、その生産量の正確な統計はまだ無いが、通産省は生産量の 10～15% を占めつつあると推定している（昭和 52 年現在）。我々の行った畳製造業者への聴き取り調査にお

いても 10% 程度占めており、また公共住宅の一部、民間住宅にもすでに使用をみている。

表 2 は、我々の行った居住者調査における居住者の化学床の使用経験を示したものであるが、各住宅対象ごとに、わずかながら使用経験が出ている。ここで興味深いことに、調査対象のうちでマンションは全戸、いぐさ表の下に化学床（わらと発泡スチロールのサンドイッチタイプ）を使用した畳が入っているにもかかわらず、使ったことがあると正確に答えているのは 2 割弱にすぎず、残りの居住者は化学床だと気づかずにいる。このように使っていても案外わからずに使用されているようである。従来のわら床と化学床（この場合、わら併用サンドイッチタイプ）の使用感の判然とした差異がないということなのだろうか。使用感のちがひとして、化学床は硬いということがいわれている。

## (3) 化学床への期待

- ・ 湿気ないこと

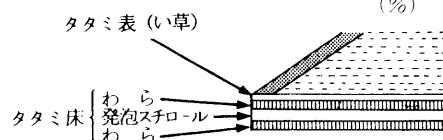
畳業者はまず化学床の長所として湿気にくいことをあげている。本来畳は、床下換気のある通風をもった日本住宅の構造と深く結びついている。すなわち、高温多湿の気候の中で畳をよい状態で使うためには床下換気が必須の条件であったのである。そういう条件のもとで調湿性という畳の特性が生かされてきた。ところが、鉄筋コンクリートの集合住宅になると、床下の通風換気というものではなく、コンクリートスラブの上に畳下地が施され、その上に直に畳を敷き込むことが多い。そこで、畳は結露などによってどうしても湿気やすい状態にある。温度が高く密閉された室内におかれた、この湿気た畳で、わら床に虫が発生しやすい状態となり、この種の問

表 2 「化学床の畳（化学畳）<sup>\*</sup>」の使用経験

| 使用経験<br>住宅対象別 | 化学畳(化学床の畳)<br>を使ったことがある | 化学畳(化学床の畳)<br>を使ったことがない | わからない         | 不明          | 合計             |
|---------------|-------------------------|-------------------------|---------------|-------------|----------------|
| 注文住宅          | 8<br>(6.8)              | 114<br>(85.0)           | 12<br>(9.0)   | 0<br>(0.0)  | 134<br>(100.0) |
| 中規模分譲住宅       | 18<br>(8.0)             | 175<br>(77.8)           | 30<br>(13.3)  | 2<br>(0.9)  | 225<br>(100.0) |
| 小規模建売住宅       | 5<br>(3.0)              | 131<br>(78.4)           | 28<br>(16.8)  | 3<br>(1.8)  | 167<br>(100.0) |
| マンション**       | 26<br>(18.4)            | 68<br>(48.3)            | 46<br>(32.6)  | 1<br>(0.7)  | 141<br>(100.0) |
| 建売分譲住宅(山形)    | 2<br>(2.0)              | 80<br>(80.0)            | 15<br>(15.2)  | 2<br>(2.0)  | 99<br>(100.0)  |
| 農村住宅(山形)      | 6<br>(6.8)              | 76<br>(86.4)            | 0<br>(0.0)    | 6<br>(6.8)  | 88<br>(100.0)  |
| 合計            | 65<br>(7.6)             | 644<br>(75.4)           | 131<br>(15.3) | 14<br>(1.7) | 854<br>(100.0) |

\* 畳床が化学床で、畳表はいぐさ表（右図）

\*\* 対象マンションには全戸(141戸) 右図のようなわらと発泡スチロール併用の化学床が用いられている。



題がよく生じている。このような点から、化学床を使えば、比較的湿気にくく、虫も発生しにくいということが長所としてあげられている。

・ 軽いこと

従来のわら床の重さ約 26 Kg に対し、わらと発泡スチロールのサンドイッチ型の化学床は、12 ～ 15 Kg と約半分の重さ、わらを全く使わず化学材料のみの化学床は 5 分の 1 の重さである。畳の軽量化は、畳屋にとっては、製造・運搬などにおける労働条件を大きく改善するものである。これはまた、次項の生産コストの低減にもつながることである。一方、居住者からは「大掃除の時の畳の虫干しが、主婦や子供、老人が一人でも出来るような軽い畳がほしい」という意見もあり、軽量化に対する要望がある。もっとも昨今は大掃除も少なくなっておりまた、鉄筋のアパートでは虫干しスペースもないわけであるが。

以上の湿気にくいことと、軽いことが化学床の 2 大長所であるが、他に次のようなこともいわれている。

・ その他

化学床はわら床と異なり工場生産が可能であって、大量生産ベースに近づけることが出来、したがってコストダウンも可能になる。

公共住宅などで今後、和室と洋室の変更可な住宅を考えていく場合、そのためには、敷居の高さを低くおさえるために、畳床をうすくすることが必要となり、化学床だとそれに対応したうすい床が得られるというようなこともいわれている。うすい畳床が、果して居住性にむくかどうか疑問なところである。

(4) 化学床の問題点・考慮されるべき点

表 3 は、居住者の化学畳に対する意見を示したものである。畳表も畳床も化学材料でよいという意見は、さすがにほとんどみられない。表も床も従来どおりのいぐさ、わらの方がよいという意見が 4 割以上を占めるのである

が、化学畳（化学床）の使用経験別に分けてみると、実際に化学床を使ったことのある場合に、床の方なら化学材料でもかまわないとする意見が多く（63.1 %）みられる。使ってみて、まあ床の方だったら化学材料でも許せるということなのだろうか。実際の化学床の使用感をきいた公団調査（総合試験場：化学畳の性能に関する研究・その 2）では、短期使用の範囲で大旨受け入れられているとし、使用上の問題点として硬いということを結論づけている。硬いという欠点の他に、シンナー等の揮発性の薬品に溶けてしまうことや、調湿性のないことなどがある。まだ化学床が普及しはじめてからの期間も短く、長期にわたり日常使用されていく場合の畳としての評価は今後にまたれ、まだ不明の点も多い。

しかしながら、今後わら不足が恒久化するとすれば、化学床で代替されていくのも止むを得ないと考える。畳製造業者によれば、わらと発泡スチロール併用の化学床が、今後主流となり、近い将来わら床にとってかわるだろうともいわせている。後に述べるが、畳のもつ床材としての長所の一つとして、我々の靴をはかない足にフィットした適度なクッション性、足ざわりの柔らかさがある。このわら床の持ち味が、化学床でも考慮されいくべきではないかと考える。現状の化学床の欠点として硬いことがあげられているわけであるが、畳床には、適度な硬さとクッション性が要求され、これを化学床に替わってもできるだけ保有させてほしいと思うのである。

1-4 畳の流通経路 一生産から消費者へ一

ここで、畳が消費者に渡るまでの流通経路についてふれる。従来の流通経路に対し、近年その変化がみられる。

一口に流通経路と言っても、いぐさから成る畳表と稲藁から成る畳床は、それぞれ別の流通経路をとり、さらに畳表と畳床を縫製する畳屋と、いくつかの段階を経て、消費者まで渡る。

まず、畳表の流通経路から説明しよう。

表 3 化学畳（化学床）の使用経験別にみた「化学畳」に対する意見

| 化学畳に対する意見<br>化学畳の使用経験 | 表もいぐさ、床も従来どおりのわら床の方がよい | 表はいぐさに限るが、床の方だったら化学材料でもかまわない | 表も、床も、化学材料でもかまわない | その他         | わからない         | 不明           | 合計             |
|-----------------------|------------------------|------------------------------|-------------------|-------------|---------------|--------------|----------------|
| 化学畳（化学床）を使ったことがある     | 11<br>(16.9)           | 41<br>(63.1)                 | 0<br>(0.0)        | 3<br>(4.6)  | 8<br>(12.3)   | 2<br>(3.1)   | 65<br>(100.0)  |
| 化学畳（化学床）を使ったことがない     | 318<br>(49.4)          | 112<br>(17.4)                | 11<br>(1.7)       | 6<br>(0.9)  | 177<br>(27.5) | 20<br>(3.1)  | 644<br>(100.0) |
| わからない                 | 30<br>(22.9)           | 34<br>(26.0)                 | 0<br>(0.0)        | 1<br>(0.8)  | 60<br>(45.8)  | 6<br>(4.5)   | 131<br>(100.0) |
| 不明                    | 1<br>(7.1)             | 1<br>(7.1)                   | 0<br>(0.0)        | 0<br>(0.0)  | 0<br>(0.0)    | 12<br>(85.8) | 14<br>(100.0)  |
| 合計                    | 360<br>(42.2)          | 188<br>(22.0)                | 11<br>(1.3)       | 10<br>(1.2) | 245<br>(28.7) | 40<br>(4.6)  | 854<br>(100.0) |

(%)

# (1) 畳表の流通経路 <いぐさ～畳表～畳屋へ>

いぐさ原草が畳表とされ消費地の畳屋に至るまでの経路は、いぐさの旧主産地の岡山と新主産地の熊本とでは異なるが、全国いぐさ生産量の6割以上を占めている熊本の場合について述べることにする。

## 1) いぐさから畳表まで

図6はいぐさ原草の流通機構を示したものであるが、それは次のような二系統に分かれる。

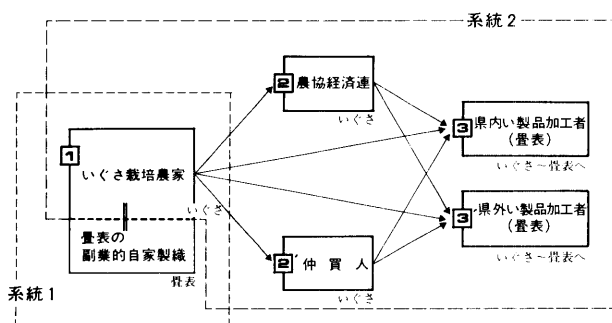


図6 いぐさの流通機構図 -いぐさから畳表へ-  
 <熊本の場合>

系統1：いぐさ栽培農家が織機を所有し、自家労力による畳表生産を行う。これは栽培農家の副業となっており、熊本県ではこのようなケースが多い。

系統2：自家製織によらないいぐさは、農家から、農協経済連の市場(2)・仲買人(2')を経るか、あるいは農家から直接、県内(3)や岡山・広島などの県外畳表加工者(3')に渡り畳表に製織される。

図7は、いぐさと畳表の生産量を、主産地別にみたものであるが、これによると広島畳表の生産量は今でも全国の2割以上を占めており、岡山・熊本のいぐさが広島に流れ、ここで名高い銘柄の備後表として出荷されていることがよくわかる。岡山・広島でも、かつていぐさの主産地であった頃には、現在の熊本のように栽培農家は畳表を副業的に自家製織していたが、製織者の高齢化などにより減少し、現在では問屋(図

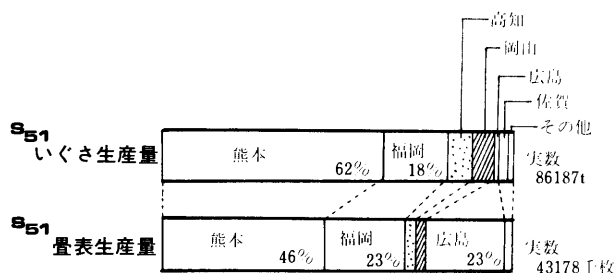


図7 主産県別いぐさ・畳表生産量

6の③に該当)が主に製織している。これらは主産地時代に設備投資した織機によって、県外産いぐさを製織しているのである。そしてかれらは伝統があり全国に販路をもっている。

## 2) 畳表から畳屋へ

さらに図8では、畳表が畳屋に渡るまでの経路を示すが、農家で製織された畳表は、農協市場に出され(1→2)、熊本・福岡・岡山・広島などの産地卸問屋(これらは入札権をもち全国的販路をもつ)に渡る(2→3)。そして、ここから消費地の卸問屋(畳材料商)を経て、町の畳屋に渡るという経路をふんでいる(3→4→6)。ただし大口需要の畳屋には、産地卸問屋から直接に販売されるケースもある(3→6)。また、大口畳屋(官公庁入札権をもつ)で組織された京阪神畳事業協同組合では、農協経済連との年間契約により、直接取引している(2→5-6)。

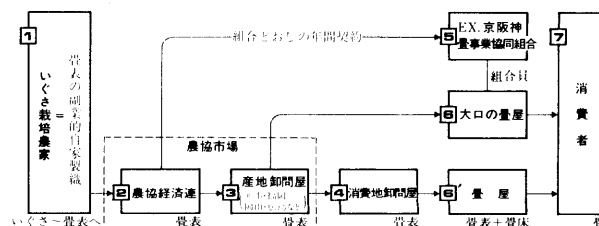


図8 畳表の流通機構図 -畳表から畳屋へ-  
 <熊本の場合>

## (2) 畳床の流通経路

### 1) 畳床屋の分業化 (図9の②)

もともと畳床は畳屋が作ったものであるが、関東大震災後、震災復興の大量需要に応じ、また畳床製畳機(明治41年に発明)の普及もあって、畳床屋が出現した。また、わらを利用して副業に畳床をつくる農家も出てきたのである。

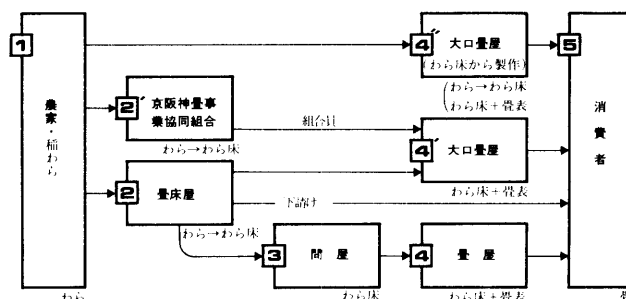


図9 畳床の流通経路

しかし、近年において畳床の製造が畳屋から本格的に分業化しはじめたのは高度成長期からで、住宅の大量建設に伴う畳の大口需要(公共住宅、マンション)にこたえて畳床屋が形成されていった。これらの畳床生産者は東京周辺の稲作地帯をひかえ千葉・埼玉などに多く分布していたが、経済成長期の都市化の波(宅

地化、労働力の流出、人件費の高騰）はこれらを押しながらし、現在では、なお豊富な穀倉地をひかえた宮城県に分布の重点を移すことになった。宮城には、もとも縄・かます製造等のわら加工業者があり、これらが畳床屋に転業して東京の需要に応じてきている。以上のように、稲わらを求めて、消費地より遠くに移動せざるをえない現状である。

## 2) 畳床の流通経路について（図9）

畳床屋で製作された畳床は、問屋を通して畳屋に渡る（〔2〕→〔3〕→〔4〕）のが一般的であるが、大口の畳屋には直接渡る（〔2〕→〔4〕）。また大口の畳屋の中には、農家からわらを買ってわら床から製作しているものもある（〔1〕→〔4〕）。この大口畳屋の中には、次に述べるような畳床屋からの転業者もいる。

近年、大都市周辺の畳床屋では、大口畳屋（公共住宅、マンション関係の集中大量需要）の下請けで、畳表もつけて住宅に直送するケースも多くなっている（〔2〕→〔5〕）。これら畳床屋のなかには、高度成長期の大量需要に呼応して大口畳屋に転業したものもあるが、縫着機、製畳床機など畳生産の機械によって熟練した畳職人技術も不要となり、この転業を容易にさせたのである。

## 1-5 高くなった畳

表4は、畳表の小売価格の推移を示したものである。昭和40年を100として指数化し、消費者物価指数の上昇と比較すると、畳表のその上昇が著しいことがよくわかる。表5をみると畳床も同様に、激しい価格上昇率を示している（畳床は、直接消費者に渡ることはないので

表4 畳表小売価格の推移（東京都）

〔備後表・動力織・並級・替工賃含む〕

| 年    | 小売価格<br>(¥/枚) | 指数    | 消費者<br>物価指数 |
|------|---------------|-------|-------------|
| S 40 | 1,060         | 100.0 | 100.0       |
| 41   | 1,160         | 109.4 | 105.1       |
| 42   | 1,400         | 132.1 | 109.3       |
| 43   | 1,500         | 141.5 | 115.0       |
| 44   | 1,520         | 143.4 | 121.1       |
| 45   | 1,690         | 159.4 | 130.4       |
| 46   | 2,030         | 191.5 | 138.3       |
| 47   | 2,180         | 205.7 | 144.6       |
| 48   | 2,400         | 226.4 | 161.5       |
| 49   | 3,060         | 288.7 | 201.0       |
| 50   | 3,240         | 305.7 | 224.8       |

- 指数は、S40を100として算出。
- 消費者物価指数は、S40を100として、著者が換算。  
総理府統計局：「小売物価統計調査年報」に基き、著者が作成。

表5 畳・畳床 卸平均価格の推移

通産省：工業統計表より著者が作成

| 年    | 卸平均価格<br>(¥/畳) | 指数    | 卸売<br>物価指数 |
|------|----------------|-------|------------|
| S 40 | 655            | 100.0 | 100.0      |
| 41   | 752            | 114.8 | 102.4      |
| 42   | 806            | 123.1 | 104.3      |
| 43   | 902            | 137.7 | 105.1      |
| 44   | 925            | 141.2 | 107.4      |
| 45   | 872            | 133.1 | 111.3      |
| 46   | 1138           | 173.7 | 110.5      |
| 47   | 1443           | 220.3 | 111.4      |
| 48   | 1542           | 235.3 | 129.1      |
| 49   | 2150           | 328.2 | 169.5      |
| 50   |                |       |            |

- 指数は、S40を100として算出。
- 卸売物価指数は、日本銀行統計局「物価指数年報に基き」S40を100として、著者が換算。

卸売物価で比較）。以上のように畳が高くなってきている理由として、畳生産関連聴きとり調査から得た結果から、次のようなことが考えられる。

## ■ いぐさ・畳表生産面

- ① いぐさ栽培には、もともと機械化しにくい面があるとはいえ、稲作などに比べると、全般的に機械化が遅れており（刈り採り、泥染、乾燥の各作業段階における機械化に対し、いぐさの質を下げない考慮が必要とされるため）、労働集約型の作物としてコスト高になっている。
- ② 一方、機械化の進んでいる産地（九州）では、逆に、機械施設の資本装備に多額の費用を要し生産費の高騰につながっている。
- ③ 畳表織機の自動化・高度化が進まず、人手のかかる織機となっている。この点については、次のわら床・畳製作を含め、畳生産全般に共通した問題である。高度化するために投資するほどの需要が期待されないのでもあるが。

## ■ わら床生産面

- ① コンバインの普及により、畳床原料用のわら（長いわら）が不足気味である。
- ② わらを得る為には、機械の入らない山田や、あるいは宮城など（契約によって畳床用のわらを手で刈り別置き）の、消費地から遠方の穀倉地で調達せねばならない。

## ■ 畳製造面

- ① 畳表と畳床を縫製し畳を製作する段階でも、人が具体的に機械を使用して製作し、半オートメーション化が限界である。
- ② 最終段階で住宅に畳を入れ込む時、その部屋にあわせた寸法とりが必要で、規格化して既製品に

することが難しい。

昭和 51 年の畳表の急騰については、天候不順・流通市場の問題などの特殊要因にもとづいているが、畳生産全体にわたる構造的な高騰化の原因として以上の点が考えられ、畳は現在の生産事情の中では高くならざるを得ないといえよう。

こうした畳の高騰化は、また、居住者の「畳ばなれ」の一因になっている。表 6 に示すように、畳表替えが減少しており、我々の行った居住者調査（後述）においても、畳の表替えなどに費用がかかるという意見が多くみられた。例えば、こんな意見がある。「このごろの畳は質が悪く、表替えしてもすぐに傷むので、カーペットを敷いてがまんしている」。畳の上に敷物が敷かれている理由として、畳の保護のためというのが多い。

表 6 畳表とカーペットの年間使用量の推移

(一世帯当り)

| 項目<br>年次 | 畳 表 替 え       | カー ペ ッ ト       |
|----------|---------------|----------------|
| S 38     | 1. 24 帖 (122) | —              |
| 39       | 1. 19 (117)   | —              |
| 40       | 1. 07 (105)   | —              |
| 41       | 0. 91 ( 89)   | —              |
| 42       | 1. 02 (100)   | 0. 082 枚 (100) |
| 43       | 0. 94 ( 92)   | 0. 099 (121)   |
| 44       | 0. 909 ( 89)  | 0. 101 (123)   |
| 45       | 0. 944 ( 93)  | 0. 121 (148)   |
| 46       | 0. 778 ( 76)  | 0. 125 (152)   |
| 47       | 0. 730 ( 72)  | 0. 149 (182)   |
| 48       | 0. 619 ( 61)  | 0. 176 (215)   |
| 49       | 0. 651 ( 64)  | 0. 166 (202)   |
| 50       | 0. 534 ( 52)  | 0. 170 (207)   |
| 51       |               |                |

総理府統計局：家計調査年報に基く

●カッコ内は、S42を100とした指数

「畳の質が悪く、すぐに傷むので敷物を敷かざるをえない。敷物を敷かなくてもすむような良い畳がほしい。」といった意見が多々きかれるのである。ちなみに、畳表替は一番安いもので2万4千円／6畳（表替5等級・近畿畳商工業協同組合・昭和 51 年 8 月・標準価格表）、（高いものは表替で12万円以上／6畳）、カーペットならば9千円／6畳からあり、カーペットで保護して、表替えをがまんする人が出てくることも当然といえよう。

## Ⅱ 床面様式と起居様式

### 2-1 最近の住宅における「洋室化」傾向

畳の生産面の事情に対応して、居住者側の住宅状況、畳への指向性等をみようとしたのが本論である。調査対

象は表 1 に示すように、主として都市中流住宅の数階層のものを選んだ。つまり、中規模戸建（30～35坪が52%）として阪急・京阪・近鉄等大手不動産による分譲、注文住宅（30～35坪22%、40～45坪18%）小規模戸建（15～20坪が55%）として小林住宅・森本興産等大手建売業者による建売住宅。これに最近都市住宅に特徴的な比重を占めつつあるマンション形式の住宅（以上1970～75年建設のもの）。また以上の他に、地方的特色あるいは伝統的特色をもつものとの比較という意味から、山形市近郊の中流新築住宅、奈良県橿原市今井町の町家住宅などを部分的に関係ある調査対象として加えた。

分譲住宅・建売住宅・マンション等は、いうまでもなく業者サイドの計画ならびに設計である。しかし業者は顧客に応じやすい販売を意図しているし、客も一応納得して購入しているとみれば、現在の住宅傾向を知る対象として考えうるだろう。

その点で注文住宅は居住者の要求傾向をそのまま反映しているといえる。

紙数がないので各住宅階層について1～2例ずつプランを示すが、全体にほゞ共通していえることは、L・D・K部分はほとんど板間になっていること、その他の室については1～2室が板間、さらに残りの2～3室が畳になっている。板間対畳間の比は各々の住宅室数によって多少ちがうが、一般的にいつて2～3室の畳間を残して残り全部が板間になる傾向が顕著である。

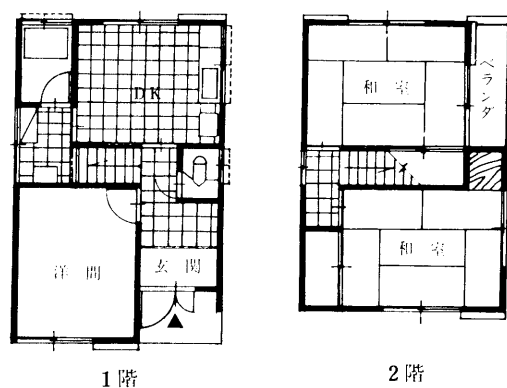


図 10 小規模建売住宅 <DK+洋室型プラン>



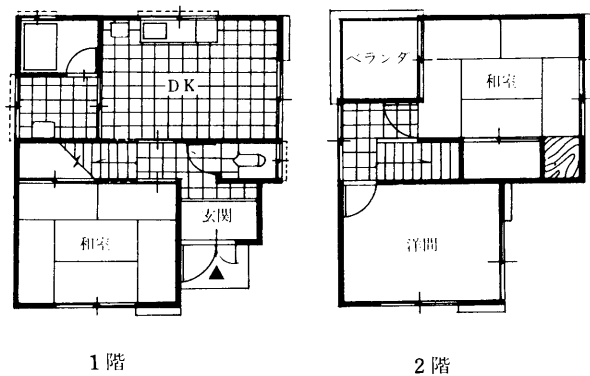


図 11 小規模建売住宅 <DK+和室型プラン>

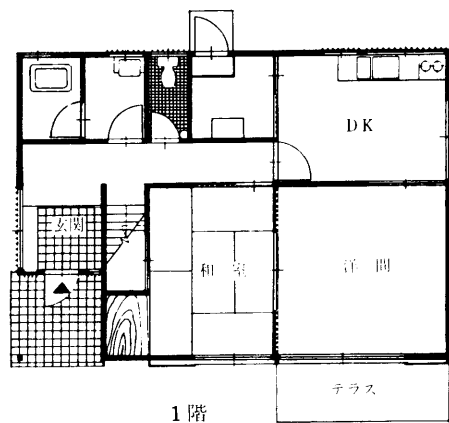
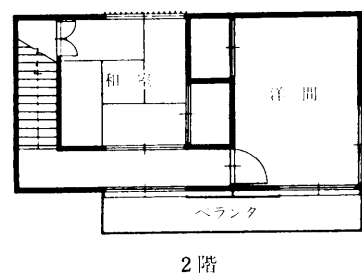


図 12 中規模分譲住宅 <DK+洋室型プラン>

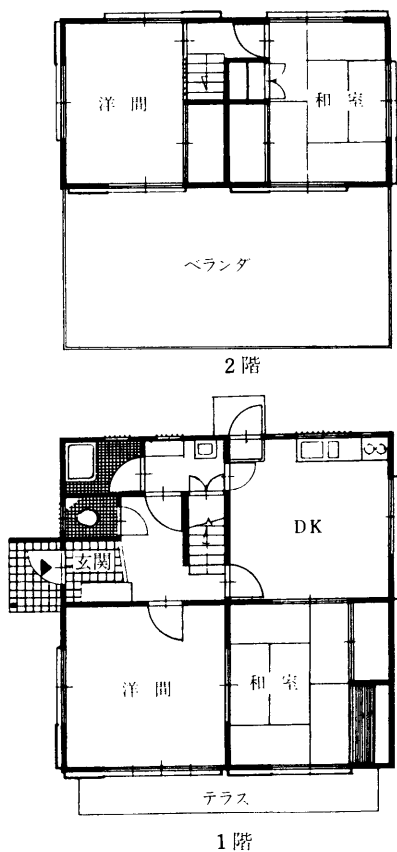


図 13 中規模分譲住宅 <DK+和室型プラン>

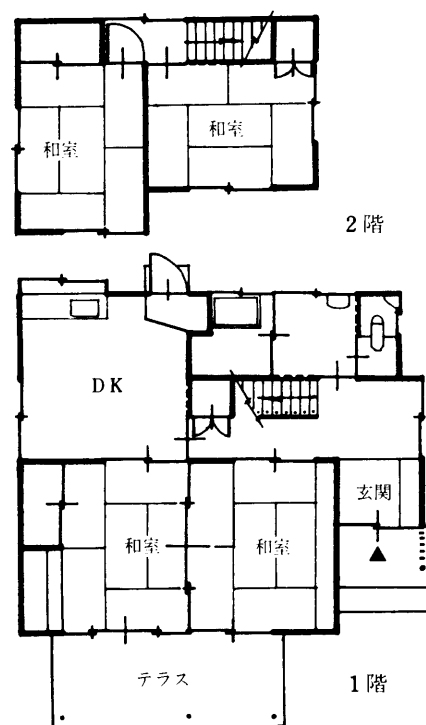
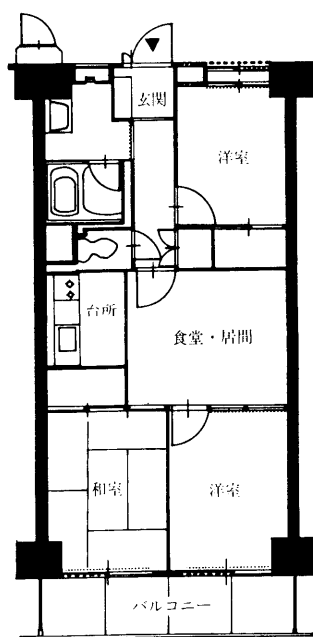


図 14 マンション・山形建売分譲住宅

L・D・Kについては、その組合せで室型がつけられるが、最も多いのはDK＋L型あるいはDK＋畳の居間というタイプもかなりある。ただしLは明確にリビングルームと性格づけないで「洋室」として提供されており、プラン上での位置関係ないし居住者の住み方指向によって居間になったり応接室化（同上洋室の約1/3）したりしているのが、現実である。

表7は、各住宅階層について住宅室数による規模別に和洋室の比をみたものである。

住宅階層からみると、注文住宅では6～8室、分譲では5～6室、建売では4室あるいは6室の住宅が主要な戸数を占めているが、これらについて和洋室の比率のあり方でとくにきわだった特徴はない。

表7 和洋室の割合＜中規模分譲住宅＞

| 居室数  | 和洋の割合 | 合 計         |
|------|-------|-------------|
| 4 室  | 洋3和1  | 1 ( 0.4 )   |
| 5 室  | 洋4和1  | 3 ( 1.3 )   |
|      | 洋3和2  | 44 ( 19.6 ) |
|      | 洋2和3  | 5 ( 2.2 )   |
| 6 室  | 洋5和1  | 3 ( 1.3 )   |
|      | 洋4和2  | 49 ( 21.8 ) |
|      | 洋3和3  | 70 ( 31.1 ) |
|      | 洋2和4  | 15 ( 6.7 )  |
| 7 室  | 洋5和2  | 3 ( 1.3 )   |
|      | 洋4和3  | 13 ( 5.8 )  |
|      | 洋3和4  | 9 ( 4.0 )   |
|      | 洋2和5  | 2 ( 0.9 )   |
| 8 室  | 洋5和3  | 2 ( 0.9 )   |
|      | 洋4和4  | 5 ( 2.2 )   |
| 10 室 | 洋7和3  | 1 ( 0.4 )   |
| 合 計  |       | 225 (100.0) |

数字は件数（ ）内は%

しかし室数規模別に全体の傾向をみると、畳室については2～3室をもつ場合が多く、しかもそれは室数規模の多少に関らず畧一定している傾向がある。

ということは逆に、洋室に関していえば住宅の室数が多いほど洋室の比率が高くなるということになる。

たゞしこのような事情は、京阪神地域の一定住宅階層についてであり、地域的にはかなり異なってくる。たとえば山形市近郊の同種住宅では圧倒的に畳室が多くなる。

以上のような傾向を、室種別にみると図15のようになる。問題をしぼる意味で、とくに畳室で数の多い室種をひろいながら考察すると、つぎのようなことがいえる。

畳室は、寝室とくに夫婦寝室について多くのこされている。たゞそれも小数ながら洋室化の兆しがある。

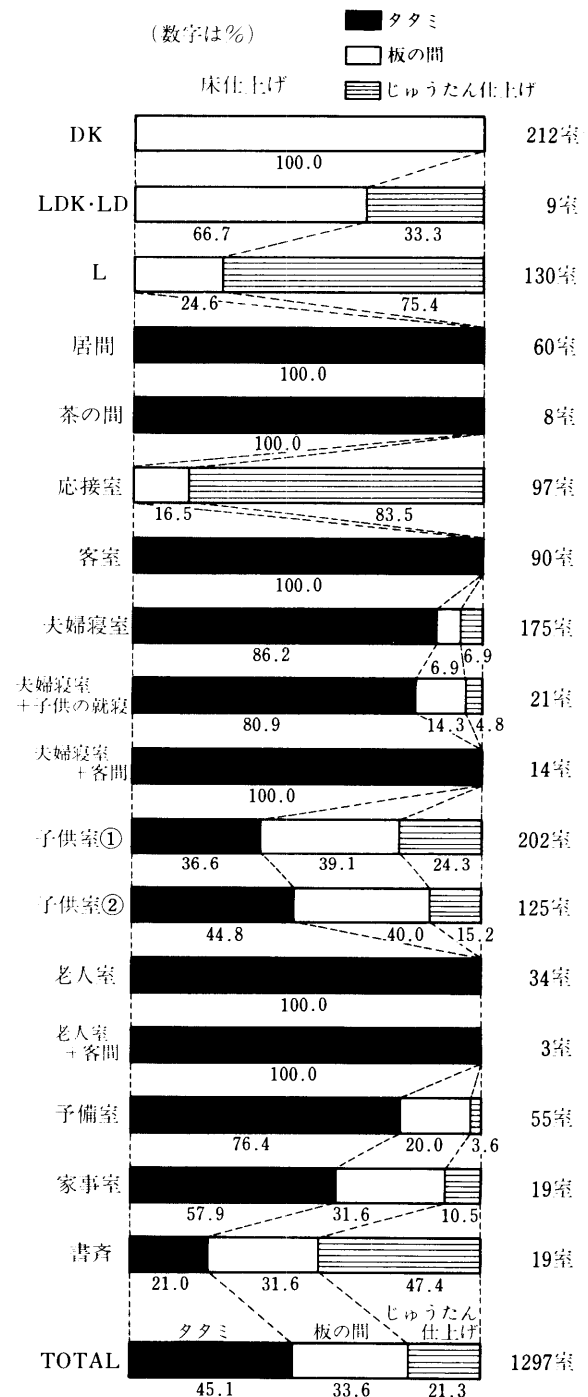


図15 各室の床仕上げ＜中規模分譲住宅＞

子供室については一般に印象されるようにむしろ洋室化しているとみてよい。1室以上の場合もその傾向がつよい。

専用の座敷は当然だが、寝室兼用ないし予備室としてとられる時も畳室にされることが多い。

特徴的なことは、リビングにあたる居間として畳室を用いている例がかなりあることである。後述の起居様式とも関連するが、畳にじゅうたんを敷き坐・椅子兼用の例もありうるし、板・じゅうたん仕上げで坐、椅子兼用の例もある。しなないし居間については、融合した生活様式の存在が考えられる。

## 2-2 起居様式・床面様式の現状とその要求傾向

戦後 30 余年、とくに高度経済成長期を通じて、起居様式の面でイス座が住生活のかなり広範な部分にわたって浸透してきている。

そこで、起居様式の現状（どこまでイス座が浸透しているのか）とその要求傾向について、今一度、確認しておきたい。と同時に、じゅうたん・カーペット類などの普及による新しい床面様式の動向と関連させながら、イス式化の進行の中での畳への志向性を考えたい。

### (1) 和洋室構成からみた部屋の使われ方

#### ――戸建住宅における全体的傾向――

まず最初に、どのような部屋に和洋室が使い分けられる傾向にあるのかを、今回は戸建住宅を中心に、その全体的な傾向についてふれる。

部屋の使われ方を見る前に、L・D・Kの公的空間の扱われ方を中心にしたプラン型について説明しておく。

#### 1) DK形式の定着

調査対象のいずれの住宅階層においても、前章のプラン図に見るように、食事の場はDK, LD, LDKという形式で供給されており、イス式を前提としている。とりわけ、戸建住宅では、表8に示すように、DK形式のプランが9割を占めている。なお、マンションはすべてLDKで供給されている。

表8 供給プラン型

(%)

|             | DK<br>+<br>洋室 | DK<br>+<br>和室 | DK<br>+<br>洋室<br>+<br>和室 | LDK         | LD         | 茶の間        | 合 計            |
|-------------|---------------|---------------|--------------------------|-------------|------------|------------|----------------|
| 小規模<br>建売住宅 | 33<br>(45.2)  | 29<br>(39.7)  | 3<br>(4.1)               | 2<br>(2.8)  | 3<br>(4.1) | 3<br>(4.1) | 73<br>(100.0)  |
|             | 65<br>(89.0)  |               |                          | 5<br>(6.9)  |            | 3<br>(4.1) |                |
| 中規模<br>分譲住宅 | 74<br>(36.8)  | 96<br>(47.8)  | 16<br>(8.0)              | 15<br>(7.4) | 0          | 0          | 201<br>(100.0) |
|             | 186<br>(92.6) |               |                          | 15<br>(7.4) |            | 0          |                |
|             | 251<br>(91.6) |               |                          | 20<br>(7.3) |            | 3<br>(1.1) | 274<br>(100.0) |

\* 不明は除く

\*\* マンションはすべてLDK型

以上が供給プランの説明であるが、次に、使われている現状について見てみよう。表9は、各住宅階層において、居住者が食事に使っている部屋の現状を示したものである。ほぼ供給プランどおりにDKが使われているといえるが、小規模建売住宅で食事の場として茶の間が使われている例がある。これは、DKが狭いために、食事がDKに続く和室に押し出された結果によるものが多い。中規模分譲住宅では、ほとんどがDKである。居住者の好みが反映された注文住宅では、L

D形式が約2割ほどあるが、やはりDK形式が主となっている。

表9 食事空間の現状

(%)

| 部屋の形式<br>住宅階層 | 洋 室<br>DK     | LDK<br>LD     | 和 室<br>茶の間  | 不 明        | 合 計            |
|---------------|---------------|---------------|-------------|------------|----------------|
| 小規模建売住宅       | 147<br>(88.0) | 6<br>(3.6)    | 14<br>(8.4) | 0          | 167<br>(100.0) |
| 中規模分譲住宅       | 219<br>(97.3) | 6<br>(2.7)    | 0           | 0          | 225<br>(100.0) |
| 注 文 住 宅       | 114<br>(85.1) | 9<br>(14.2)   | 1<br>(0.7)  | 0          | 134<br>(100.0) |
| マ ン シ ョ ン     | 0             | 130<br>(92.2) | 3<br>(2.1)  | 8<br>(5.7) | 141<br>(100.0) |

### 2) 「DK+洋室」型と「DK+和室」型

#### ――「洋室のL」と「和室の居間」――

食事の場については、DK形式（イス式）が主であったが、L（団らん・くつろぎ）に相当する空間については、扱われ方が少し異なる。すなわち、DKに続く団らんの部屋として、表8に示すように今回対象とした住宅階層別の供給プランでは、洋室の「L」を想定している場合（図10、図12）と、和室の「居間」を想定している場合（図11、図13）がある。

団らんの場が和室になっている場合と、洋室になっている場合のそれぞれにおいて、設計意図どおりに団らんの場として使われているかを供給プランのわかる調査対象をとり出し見てみると、表10のような結果であった。

表10 供給プランからみた団らんの場の使われ方

| 供給プラン型<br>団らんに<br>使っている部屋 | DK<br>+<br>洋室<br>(L) | DK<br>+<br>和室<br>(居間) | 計   |
|---------------------------|----------------------|-----------------------|-----|
| 小規模<br>建売住宅               |                      |                       |     |
| 洋 室                       | 25                   | 1                     | 26  |
| 和 室                       | 8                    | 28                    | 36  |
| 小 計                       | 33                   | 29                    | 62  |
| 中規模<br>分譲住宅               |                      |                       |     |
| 洋 室                       | 64                   | 38                    | 102 |
| 和 室                       | 10                   | 58                    | 68  |
| 小 計                       | 74                   | 96                    | 170 |

□：設計意図どおりに使われている例数

□：設計意図と異なる例数

1. 小規模建売住宅については、洋室になっている場合には、それはLとして使われず、他の和室を居間として使っているケースが多い。
2. 中規模分譲住宅では、逆に、和室になっている

場合に使われず、近くの洋室をLとして使うケースが多くみられる。

- しかし、小規模建売住宅、中規模分譲住宅ともに、「和室の居間」と「洋室のL」の2つの型が存在しており、小規模建売では居間がやや多く（6割）、中規模分譲ではLの方がやや多い（6割）。

一方、居住者の好みが反映されていると考えられる注文住宅においても、団らんの部屋を洋室のリビングルームとした場合が6割、和室の居間とした場合が4割と、2つの型が併存しているといえる。

戦後、なかんづく高度経済成長期以降、リビングルーム、いわゆる洋式の「L」なるものが、都市住宅プランの主流をしめるようになり、団らんの場の「洋式化」も進捗しつつあるかに見える。洋式のリビングルームがやや優勢になりつつあるが、決して和室の居間が消えつつあるというものではなく、今回対象の戸建住宅階層では、かなりの割合で存在していることが特徴的であった。

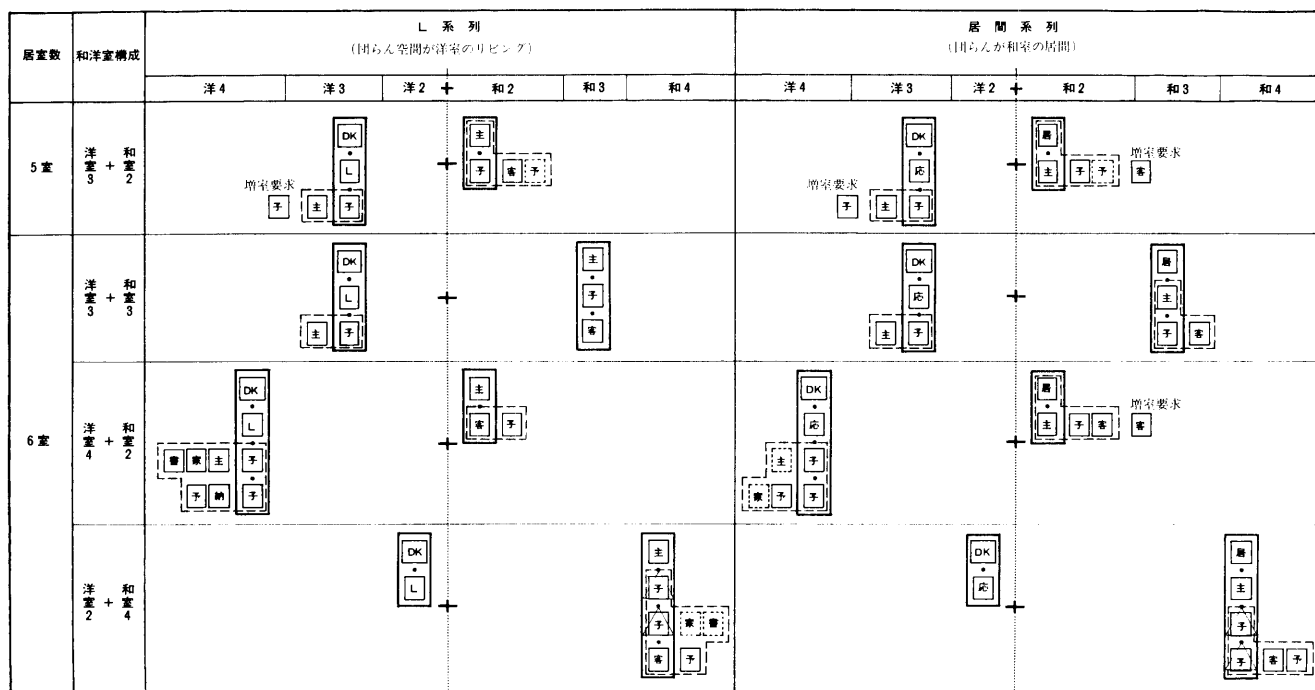
### 3) 和洋室構成からみた部屋の典型的使用パターン

—中規模分譲住宅の場合＜夫婦＋子供（小学生以上）＞—

ここでは、家族構成、居室数との関係から、とくに例数の多い5室、6室をもつ中規模分譲住宅をとりあげてみる。図16は、夫婦と子供（小学生以上）の家族構成を中心に、その典型的な使用パターンを示したものである。プラン上の関係や家族構成によって、種

々の使い方が見られるが、図のように団らんの場が洋室（L）であるか、和室（居間）であるかで大きく2系列の使用パターンに分類される。以下、ここでは洋室のLの場合を「L系列」、和室の居間の場合を「居間系列」と呼ぶことにする。L系列では、Lで客の応接が兼ねられるが、居間系列では、応接室（洋室）が必ず別にとられている。食事室がDKに、子供室が洋室になり、またプランの原型も変化しているが、洋化の始まりとなった大正時代の応接室の流れが、今なお一つの型として存続している。居間（和室）は接客から分離されるので、専用のくつろいだ居間となる。その代り、一部屋の洋室が応接室にとられていることになり、L系列に比べて、一室余分に部屋が必要となる。

図16中、実線で囲んだ部分は、もっとも多い主要パターンであり、破線で囲んだ部分は、家族構成などによって使われ方が変わるものを示している。夫婦と子供二人（小学生以上）のケースを見ると、L系列では、居室数6室で洋室4＋和室2の型が、和洋室の変更希望や、増室要求も少なく、一番安定していた。この型で主寝室が洋室化し、洋室5＋和室1になると、和室一室として客間が残ることになる。洋室2＋和室4の和室の多い型では、とくに子供室の洋室変更希望が多くみられた。居間系列では、居室数6室で洋室4＋和室2の場合、L系列ならば安定していたが、洋室の応接室があるにもかかわらず、さらに客間（和室）の増室要求が表明されている。



#### ●INDEX

典型的の使用パターン   
 家族構成などによって使われ方が変わるもの   
 部屋の使われ方   
 DK アイニク   
 主寝室   
 居間   
 客間   
 書斎   
 子供室   
 応接室   
 納戸   
 家事室   
 和洋室変更希望

図16 和洋室構成からみた部屋の曲典型的使用パターン —中規模分譲住宅—  
＜夫婦＋子供（小学生以上）＞

今回は、一戸建中規模分譲住宅で家族構成が夫婦＋子供（小学生以上）の場合についてのみ概述したにすぎず、他の住宅階層、規模別、家族周期・構成別の部屋の使われ方の分析は、研究報告書において展開したい。

次節から、基本的な生活行為別に、起居様式・床面様式の動向について述べていく。各節では、小規模建売住宅、中規模分譲住宅、注文住宅、マンションの諸住宅階層の比較をまじえて、その動向を見ていく。

## (2) イス式食事の定着

DKの広さは、表 11 に示すように、全体として6畳が最も多い。ただし、小規模建売住宅ではそれより狭いものが、注文住宅では広いものが多い。

DKの床仕上げは、表 12 に示すように、ほとんどが板の間である。

マンションはLDK形式であり、広さは9～10畳前後、床仕上げは、すべてじゅうたん仕上げである。

今回対象とした、関西のホワイトカラー層の都市住宅では、図 17 にみるように、イス式食事が規模の小さい

住宅から大きい住宅階層になるにしたがって着実に定着しつつある。これは、供給プランが、DK形式で供給されていることにもよるが、さらに居住者の好みの反映された注文住宅では、イス式食事が実に、百パーセントに近い。

一方、供給プランが、イス式を前提としたDK形式であるにもかかわらず、坐式で食事をする家が少数存在するが、前節でも述べたようにこれは、DKが狭いために食事がDKに続く和室に押し出された結果によるものが多い。

図 17 に示すように、暖房上の理由や床座のくつろいだ雰囲気を求めて床座に変わる例が若干あるが、今回対象のどの階層ともにイス座が大勢となりつつあるといえてよい。図 18 で、実態別に要求の出方を見ると、坐式の家でもイス式への希望が大半を占めており、イス式の家では坐式への逆もとり要求は少なく、イス式の定着がうかがえる。図 19 は、食事における希望の起居様式と床形式の関係を示したものであるが、全体としては板床でイス式希望が多い。

以上、関西対象住宅階層での動向であるが、山形建売分譲住宅、伝統的な奈良県橿原市今井町の町家では、まだまだ坐式が多い。しかし、山形建売分譲住宅での要求

表 11 DK の 広 さ

| 住 宅 階 層 | 形 式       | 広 さ        |              |               |              |              |             |             |             |             |            | 合 計            |
|---------|-----------|------------|--------------|---------------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|----------------|
|         |           | 4.5畳未満     | 4.5畳         | 6畳            | 7.5畳         | 8畳           | 9畳          | 10畳         | 11～15畳      | 15畳以上       | 不 明        |                |
| 小規模建売住宅 | DK        | 3<br>(2.0) | 47<br>(31.9) | 92<br>(62.6)  | 2<br>(1.4)   | 1<br>(0.7)   | 0           | 0           | 0           | 0           | 2<br>(1.4) | 147<br>(100.0) |
|         | LDK<br>LD | 0          | 0            | 2<br>(33.2)   | 1<br>(16.7)  | 0            | 1<br>(16.7) | 1<br>(16.7) | 1<br>(16.7) | 0           | 0          | 6<br>(100.0)   |
| 中規模分譲住宅 | DK        | 5<br>(2.3) | 0            | 136<br>(63.3) | 19<br>(8.8)  | 39<br>(18.1) | 3<br>(1.4)  | 9<br>(4.2)  | 4<br>(1.9)  | 0           | 0          | 215<br>(100.0) |
|         | LDK<br>LD | 0          | 0            | 1<br>(11.1)   | 1<br>(11.1)  | 1<br>(11.1)  | 0           | 2<br>(22.2) | 3<br>(33.3) | 1<br>(11.1) | 0          | 9<br>(100.0)   |
| 注 文 住 宅 | DK        | 0          | 5<br>(4.4)   | 48<br>(42.5)  | 16<br>(14.2) | 30<br>(26.5) | 3<br>(2.7)  | 7<br>(6.2)  | 0           | 0           | 4<br>(3.5) | 113<br>(100.0) |
|         | LDK<br>LD | 0          | 0            | 4<br>(20.0)   | 0            | 4<br>(20.2)  | 1<br>(5.0)  | 1<br>(5.0)  | 7<br>(35.0) | 3<br>(15.0) | 0          | 20<br>(100.0)  |

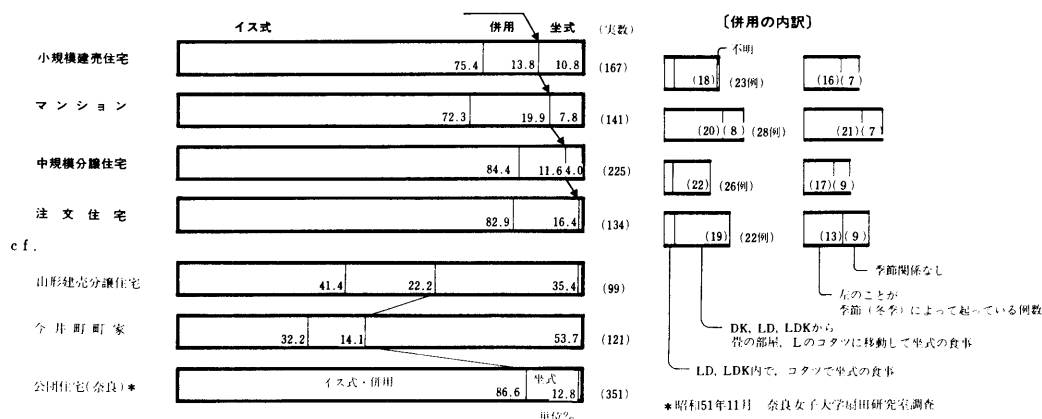


図 17 食事の起居様式の現状 <住宅階層別>

表 12 DKの床仕上げと敷物の有無

| 住宅階層    | 形式      | 床仕上げ     | 敷物の有無        |              |             |             |               |               | 不明             | 合計             |
|---------|---------|----------|--------------|--------------|-------------|-------------|---------------|---------------|----------------|----------------|
|         |         |          | 敷いている        |              | 敷いていない      |             | 不明            |               |                |                |
|         |         |          | 全体数          | 部分敷          | 全体数         | 部分敷         |               |               |                |                |
| 小規模建売住宅 | D・K     | 板の間      | 16<br>(10.9) | 9<br>(6.1)   | 3<br>(2.0)  | 7<br>(4.8)  | 1<br>(0.7)    | 108<br>(73.5) | 3<br>(2.0)     | 147<br>(100.0) |
|         |         |          | 36<br>(24.5) | 4<br>(2.6)   | 10<br>(4.7) | 10<br>(4.7) | 103<br>(47.9) | 4<br>(1.9)    | 215<br>(100.0) |                |
| 中規模分譲住宅 | LDK・L・D | 板の間      | 3<br>(33.3)  | 1<br>(11.1)  | 0           | 1<br>(11.1) | 0             | 1<br>(11.1)   | 0              | 6<br>(66.7)    |
|         |         |          | 5<br>(55.6)  | 0            | 0           | 0           | 0             | 0             | 9<br>(100.0)   |                |
|         |         | じゅうたん仕上げ | 1<br>(11.1)  | 0            | 0           | 0           | 0             | 2<br>(22.2)   | 0              | 3<br>(33.3)    |
|         |         |          | 1<br>(11.1)  | 21<br>(18.6) | 4<br>(3.5)  | 2<br>(1.8)  | 1<br>(0.9)    | 66<br>(58.4)  | 0              | 107<br>(94.7)  |
| 注文住宅    | D・K     | 板の間      | 1<br>(0.9)   | 1<br>(0.9)   | 0           | 0           | 0             | 4<br>(3.5)    | 0              | 6<br>(5.3)     |
|         |         |          | 2<br>(1.8)   | 0            | 0           | 0           | 0             | 3<br>(15.0)   | 0              | 12<br>(60.0)   |
| 注文住宅    | LDK・L・D | 板の間      | 4<br>(20.0)  | 5<br>(25.0)  | 0           | 0           | 0             | 3<br>(15.0)   | 0              | 12<br>(60.0)   |
|         |         |          | 9<br>(45.0)  | 0            | 0           | 0           | 1<br>(5.0)    | 2<br>(10.0)   | 0              | 20<br>(100.0)  |
|         |         | じゅうたん仕上げ | 2<br>(10.0)  | 3<br>(15.0)  | 0           | 0           | 1<br>(5.0)    | 2<br>(10.0)   | 0              | 8<br>(40.0)    |
| 合計      |         |          | 88<br>(13.5) | 96<br>(19.0) | 11<br>(2.2) | 20<br>(4.0) | 13<br>(2.6)   | 289<br>(57.3) | 7<br>(1.4)     | 504<br>(100.0) |

|                 |    |      |    |      |     |      |        |
|-----------------|----|------|----|------|-----|------|--------|
| 現在、坐式をしている人の希望  | 坐式 | 40.0 | 併用 | 13.3 | イス式 | 43.3 | (74.7) |
| 現在、併用をしている人の希望  | 坐  | 22.5 | 併  | 37.5 | イス  | 37.5 | (40.0) |
| 現在、イス式をしている人の希望 | 坐  | 7.5  | 併  | 6.1  | イス  | 83.5 | (212)  |

図 18 現在の食事の起居様式と希望の起居様式との関係  
＜小規模建売住宅＞

の出方をみると（図 19），関西の調査対象と同じ要求傾向を示しているのである。

### (3) 洋室の「L」と和室の「居間」

くつろぎ・団らんの場の床面様式と起居様式は，食事の場合とはかなり様子を異にする。食事の場合は，イス化が顕著な傾向であったが，くつろぎ・団らんについては，ユカ座の併存が特徴的である。前節にも述べたように，とくに戸建層では，畳の居間が予想外に多い（表 13 参照）。

#### 1) L・居間の現状 ―広さ及び床仕上げ―

L（洋室）広さは，小規模建売住宅 6 畳，中規模分譲住宅 8 畳，注文住宅 8 畳以上と，順に広がっている。一方，居間（和室）の広さについては，どの住宅階層とも 6 畳が多い（表 14 参照）。

床仕上げは，小規模，中規模の建売分譲住宅では，ともにじゅうたん仕上げが 7 割以上を占めており，最近，洋室の床仕上げが板の間よりもじゅうたん仕上げで供給されている傾向の強いことを示している。注文住宅では，板の間とじゅうたん仕上げとほぼ半々である（表 13 参照）。

マンションでは全戸 LDK であり，広さは 10 畳程度で，床仕上げはすべてじゅうたん仕上げである。

表 13 L・居間の床仕上げと敷物の有無

| 住宅階層    | 形式 | 床仕上げ | 敷物の有無               |                      |                  |                     |                      |                  |                     |                      | 小計            | 計              |
|---------|----|------|---------------------|----------------------|------------------|---------------------|----------------------|------------------|---------------------|----------------------|---------------|----------------|
|         |    |      | 敷いている<br>全体数<br>部分敷 | 敷いていない<br>全体数<br>部分敷 | 不明<br>全体数<br>部分敷 | 敷いている<br>全体数<br>部分敷 | 敷いていない<br>全体数<br>部分敷 | 不明<br>全体数<br>部分敷 | 敷いている<br>全体数<br>部分敷 | 敷いていない<br>全体数<br>部分敷 |               |                |
| 小規模建売住宅 | L  | 板の間  | 14<br>(24.5)        | 0                    | 0                | 0                   | 0                    | 0                | 0                   | 1<br>(1.8)           | 15<br>(36.3)  | 57<br>(100.0)  |
|         |    |      | 21<br>(36.8)        | 8<br>(14.0)          | 2<br>(3.5)       | 5<br>(8.8)          | 0                    | 1<br>(1.8)       | 1<br>(1.8)          | 4<br>(7.0)           |               |                |
|         | 居間 | 畳    | 29<br>(35.4)        | 7<br>(8.5)           | 8<br>(9.8)       | 6<br>(7.3)          | 0                    | 7<br>(8.5)       | 3<br>(3.7)          | 22<br>(26.8)         | 82<br>(100.0) |                |
|         |    |      | 60<br>(73.2)        |                      |                  |                     |                      |                  |                     |                      |               |                |
| 中規模分譲住宅 | L  | 板の間  | 23<br>(17.8)        | 7<br>(5.1)           | 0                | 1<br>(0.8)          | 0                    | 0                | 1<br>(0.8)          | 0                    | 32<br>(24.8)  | 129<br>(100.0) |
|         |    |      | 35<br>(27.1)        | 14<br>(10.9)         | 4<br>(3.1)       | 3<br>(2.3)          | 1<br>(0.8)           | 0                | 3<br>(2.3)          | 37<br>(28.7)         | 97<br>(75.2)  |                |
|         | 居間 | 畳    | 21<br>(27.3)        | 12<br>(15.5)         | 8<br>(10.4)      | 6<br>(7.8)          | 1<br>(1.3)           | 8<br>(10.4)      | 1<br>(1.3)          | 20<br>(26.0)         | 77<br>(100.0) |                |
|         |    |      | 57<br>(74.0)        |                      |                  |                     |                      |                  |                     |                      |               |                |
| 注文住宅    | L  | 板の間  | 10<br>(15.2)        | 17<br>(25.8)         | 0                | 3<br>(4.5)          | 0                    | 1<br>(1.5)       | 1<br>(1.5)          | 2<br>(3.0)           | 34<br>(51.5)  | 66<br>(100.0)  |
|         |    |      | 12<br>(18.3)        | 2<br>(3.0)           | 1<br>(1.5)       | 1<br>(1.5)          | 1<br>(1.5)           | 1<br>(1.5)       | 1<br>(1.5)          | 13<br>(19.7)         | 32<br>(48.5)  |                |
|         | 居間 | 畳    | 12<br>(21.9)        | 2<br>(3.6)           | 2<br>(3.6)       | 6<br>(10.9)         | 2<br>(3.6)           | 8<br>(14.6)      | 2<br>(3.6)          | 21<br>(38.2)         | 55<br>(100.0) |                |
|         |    |      | 34<br>(61.8)        |                      |                  |                     |                      |                  |                     |                      |               |                |

表 14 L・居間の広さ

| 住宅 階層   | 形式 | 広  さ       |              |              |            |              |            |              |             | 合  計                |               |
|---------|----|------------|--------------|--------------|------------|--------------|------------|--------------|-------------|---------------------|---------------|
|         |    | 4.5畳未満     | 4.5畳         | 6 畳          | 7.5畳       | 8 畳          | 9 畳        | 10 畳         | 11～15畳      |                     | 15畳以上         |
| 小規模建売住宅 | L  | 2<br>(3.5) | 4<br>(7.0)   | 46<br>(80.7) | 0          | 5<br>(8.8)   | 0          | 0            | 0           | 57<br>(100.0)       |               |
|         | 原居 | 0          | 3<br>(3.8)   | 67<br>(83.9) | 0          | 9<br>(11.4)  | 0          | 1<br>(1.3)   | 0           | 80<br>(100.0)       |               |
| 中規模分譲住宅 | L  | 0          | 1<br>(0.8)   | 18<br>(13.8) | 6<br>(4.6) | 89<br>(68.5) | 4<br>(3.1) | 10<br>(7.7)  | 2<br>(1.5)  | 0<br>130<br>(100.0) |               |
|         | 原居 | 0          | 10<br>(13.0) | 59<br>(76.6) | 0          | 8<br>(10.4)  | 0          | 0            | 0           | 77<br>(100.0)       |               |
| 注 文 住 宅 | L  | 0          | 1<br>(1.5)   | 9<br>(13.6)  | 2<br>(3.0) | 23<br>(34.9) | 1<br>(1.5) | 21<br>(31.9) | 8<br>(12.1) | 1<br>(1.5)          | 66<br>(100.0) |
|         | 原居 | 0          | 7<br>(12.7)  | 39<br>(70.9) | 2<br>(3.7) | 7<br>(12.7)  | 0          | 0            | 0           | 55<br>(100.0)       |               |

### 2) 起居様式の現状 ―床座の併存―

次に，起居様式の現状について見ていきたい。図 20 に示すように，マンションが最もイス式化が進んでいる。これは全戸が，イス式を前提とした LDK（じゅうたん仕上げ）で供給されていることによっている。

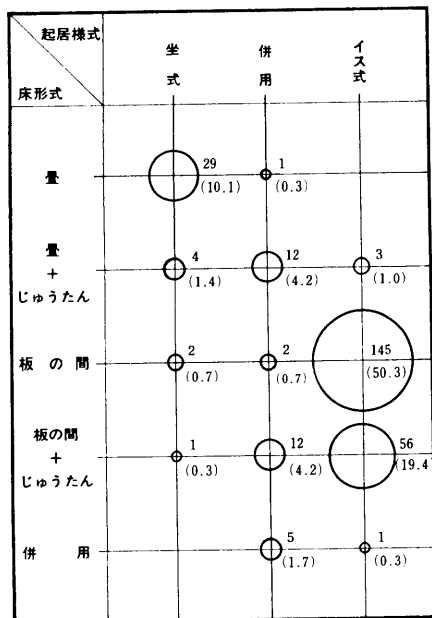
各住宅階層ともに，イス坐と床坐の両方をしている併用例が多く，この団らん・くつろぎ行為においては床座の併存が特徴的である。くつろぎ行為に，自由な姿勢の可能な床座が適しているのは言うまでもない。また，各住宅階層において，冬になると暖房上の理由から，イス座から床座に変化する例がみられる。かつていわれたほどではないが，洋室の L が暖房水準の低さから依然として十分に使いこなされていないといえる。最近では，むしろ暖房上の理由よりも，コタツで床座をとるそのくつろいだ雰囲気の評価して，コタツに床座をとっている例もあるが。

各住宅階層別の起居様式の現状については，図 20 に示すにとどめ研究報告書にゆずりたい。

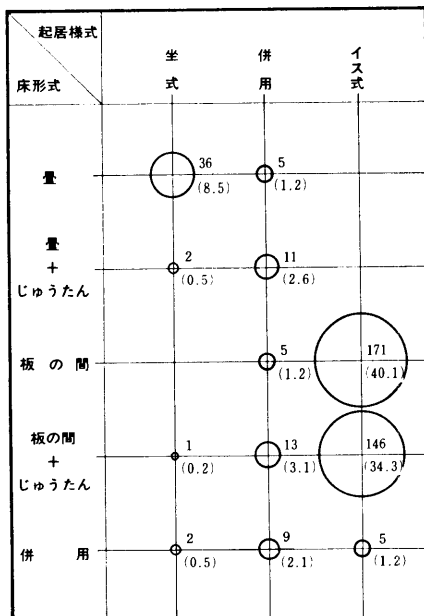
次に，表 13 にみるように，L や居間に敷き物が敷かれることが多く，少し敷物についてふれておく。

### 3) 敷物について

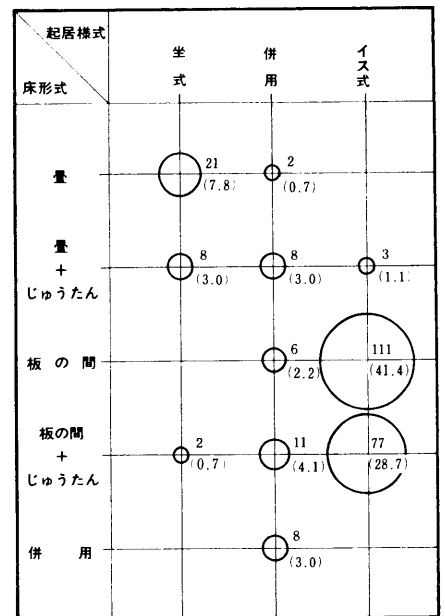
前章の表 6 に見たように，近年カーベットの使用量の伸びは著しい。今回対象の住宅において室種別にみ



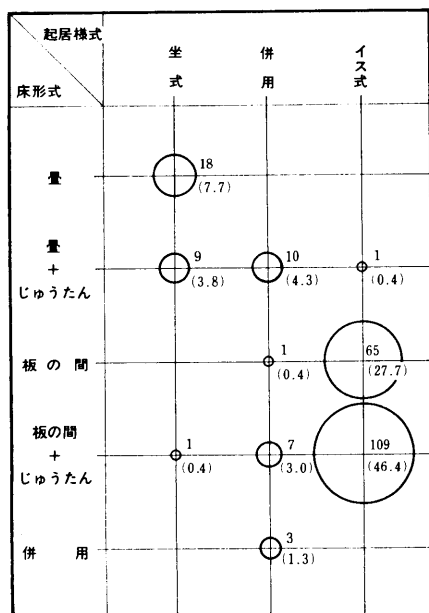
〈小規模建売住宅〉 288人中  
(不明回答15)



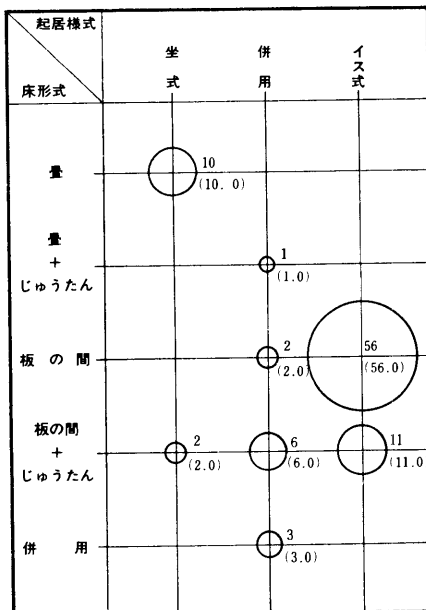
〈中規模分譲住宅〉 426人中  
(不明回答20人)



〈注文住宅〉 268人中  
(不明回答11人)



〈マンション〉 235人中  
(不明回答11人)



〈建売分譲住宅(山形)〉 100人中  
(不明回答9人)

INDEX 上段：実数(人)  
下段：(%)  
円の面積はパーセントに比例

図19 食事における希望の起居様式・床形式

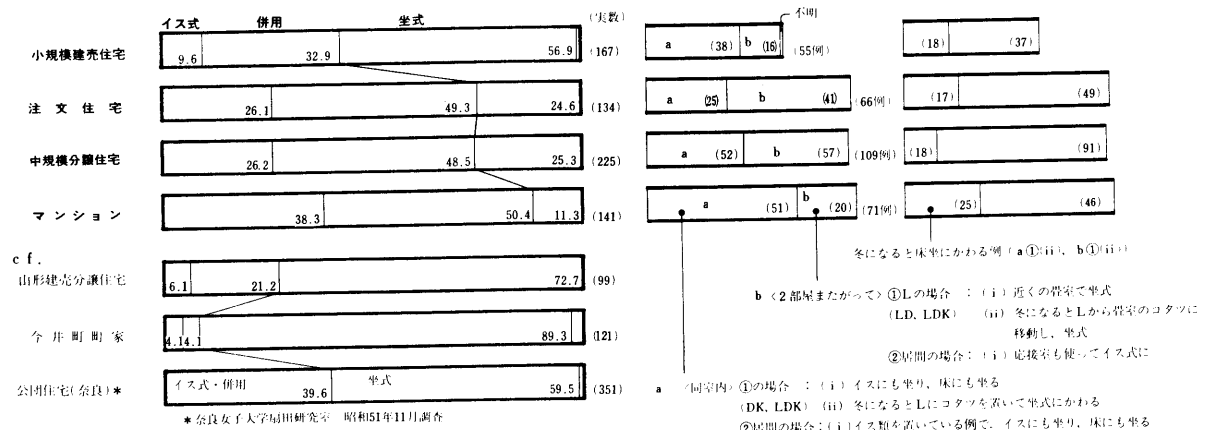


図20 団らん・くつろぎの起居様式の現状〈住宅階層別〉

ると、Lと居間に敷物が敷かれているのが最も多く、Lについては、板床に敷物を敷かずに使っている例はほとんどない。洋室のLを、以前よりも使わせている理由として、暖房水準の向上の他に、床座を親しみやすいものにさせる、この敷物の普及が考えられるのである。

Lと居間に敷き物を敷いている理由は、図 21、図 22 に示すとおりである。ともに暖くする為という理由が最も大きく、他に、Lでは足ざわりをよくする為、居間では畳の保護のためという理由などである。先に述べたように、今回対象の住宅階層では畳の居間に椅子を置いてイス式にする為に、敷物を敷いているものは少ない。

|                  |                 |      |
|------------------|-----------------|------|
| 敷いている理由<br>(MA)  | 暖くするため          | 58.7 |
|                  | 防音のため           | 10.9 |
|                  | 足ざわりをよくするため     | 25.0 |
|                  | 部屋を洋風にしたいから     | 18.5 |
|                  | 色彩的な効果を出すため     | 27.2 |
|                  | 敷物の感触が好きだから     | 12.0 |
|                  | 豪華な感じをだすため      | 26.1 |
| (92室)            |                 |      |
| 敷いていない理由<br>(MA) | 敷く必要がないから       | 86.5 |
|                  | あまりその部屋を使わないから  |      |
|                  | 汚れると手入れがたいへんだから |      |
| (37室)            |                 |      |

(%)

図 21 Lに敷物を敷いている理由と敷いていない理由  
＜中規模分譲住宅＞

|                  |                   |      |
|------------------|-------------------|------|
| 敷いている理由<br>(MA)  | 家具によるタタミのいたみを防ぐため | 19.1 |
|                  | タタミの変色や汚れを防ぐため    | 44.7 |
|                  | タタミがいたんでいるのを隠すため  | 6.4  |
|                  | 表替えがめんどうだから       | 10.6 |
|                  | 暖くするため            | 80.6 |
|                  | 防音のため             |      |
|                  | 足ざわりをよくするため       | 10.6 |
|                  | タタミであることが、いやだから   |      |
|                  | 部屋を洋風にしたいから       |      |
|                  | 色彩的な効果を出すため       | 4.3  |
|                  | 敷物の感触が好きだから       | 10.6 |
|                  | 豪華な感じをだすため        | 6.4  |
| (47室)            |                   |      |
| 敷いていない理由<br>(MA) | 敷く必要がないから         | 53.8 |
|                  | あまりその部屋を使わないから    |      |
|                  | タタミの感触を大切にしたいから   | 67.2 |
|                  | 汚れると手入れがたいへんだから   |      |
| (13室)            |                   |      |

(%)

図 22 居間に敷物を敷いている理由と敷いていない理由  
＜中規模分譲住宅＞

じゅうたん仕上げの上にさらに全体敷をしている例が多い。これは色の好みがあわないということもある

が、現在なされているじゅうたん仕上げが、とくにマンションの場合などに、コンクリートのスラブの上に少し下地をした程度に、うすいカーペットを施すものが多く、特にLなどでは、もう一枚敷いて暖く、そして柔らかくしたいということが理由となっている。

#### 4) 起居様式の要求傾向

以上のように、団らんの場合がLとして洋式化が進行してきたというものの、床坐の居間が存在し、また洋間のLでも床座との併用例も多くみられた。次に居住者の希望を見ても(図 23)、各住宅階層ともに、畳で坐式を望むものがある。図 24 は実態別に、要求の出方を示したものであるが、イス式の家で坐式への逆もとり要求がみられる。さらに、すべてイス式を前提としたLDK形式で供給されたマンションの場合、要求とのずれが大きく(図 23・図 25)、畳の居間を要求している人がある。限られた面積の中で、LDKは面積節約となるため、マンションではLDK形式が多く採用されているが、こうした傾向は供給側の方から洋式化を促進させているともいえる。

日本の履床様式は、より床座を親しみやすくさせるものであり、団らん・くつろぎ行為においては、もっと床を積極的に生かした住まい方を見直す必要がある。後章に示すように、床に座ったりゴロ寝するには、畳がよいという意見が多く畳への希望には根づよいものがある。床座に適した床材としての畳の実質が評価されているのである(図 38)。じゅうたん仕上げが普及しつつあるが、今の安易なやり方では床座にはあまり適したものはならない。床座はなにも畳に限らないでよいが、新しい床材が考えられるなら、床座に適した保温性と適度なクッション性が考慮された床下地材のあり方が検討される必要がある。現在のように、床座に適した「床」がまだ不十分であれば、今のところ最もフィットしている畳への根づよさは、図 23 にみるように、当然のことであろう(畳+じゅうたん併用が多い)。

#### (4) 主寝室の現状と志向傾向

一般的に、日本の都市住宅における起居様式の洋式化は、戦前のいわゆる中流住宅の応接間から始まり、戦後、DK、L、子供室と、庶民住宅の全般にわたって進行している。こうした日本住宅における「洋式化」進行の中で、最後の段階にある主寝室の洋室化傾向について述べる。

##### 1) 主寝室の現状

床仕上げは全体としては和室が多く、供給プランが主寝室として、和室を前提にしていることを反映している。小規模建売住宅では、ほとんどが和室であるが、中規模分譲住宅、注文住宅、マンションの順に洋室が



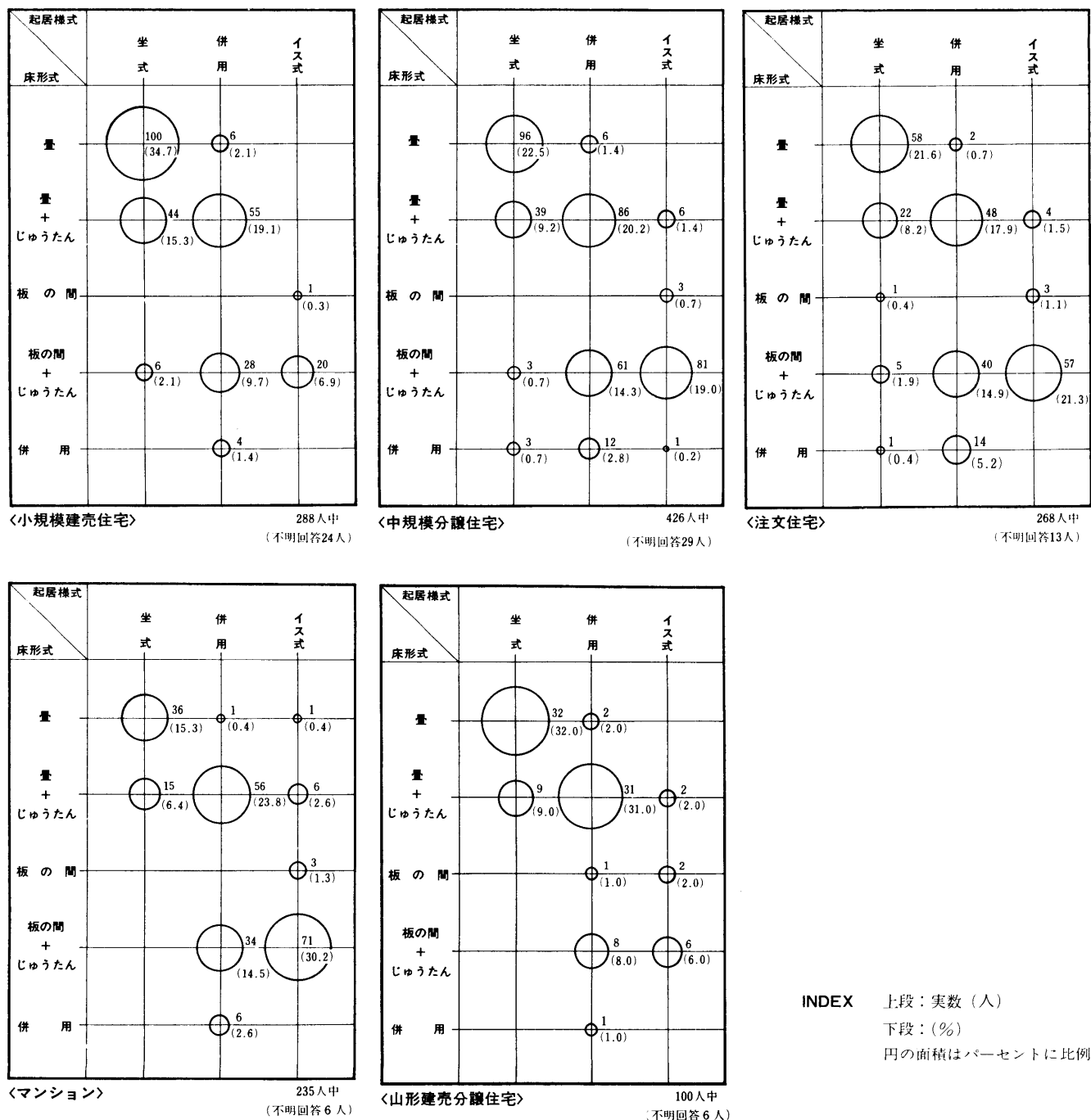


図 23 団らん・くつろぎにおける希望の起居様式・床形式

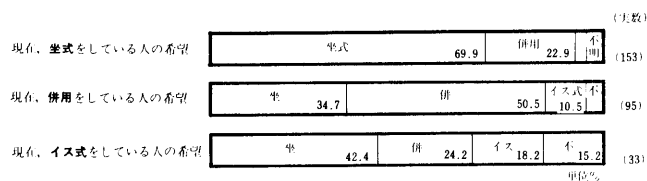


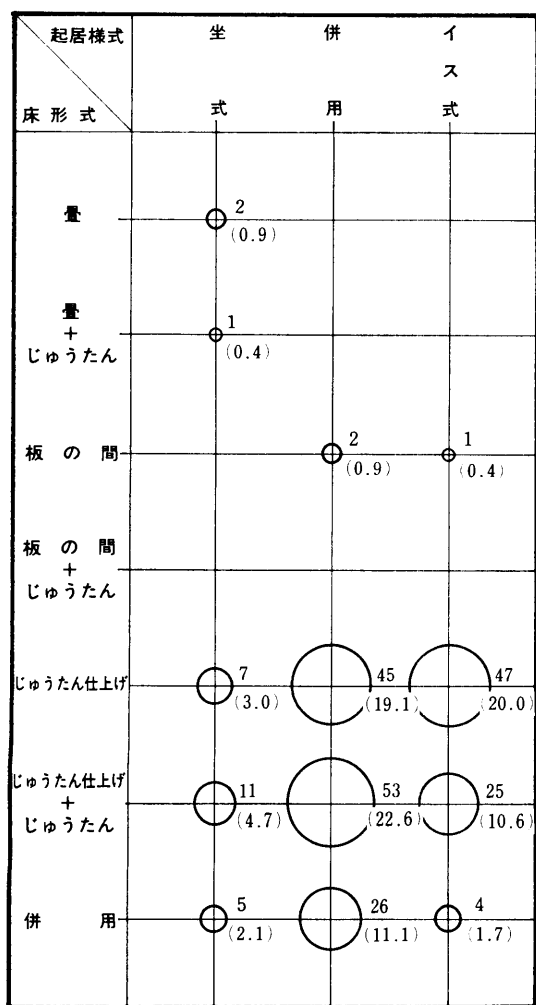
図 24 現在の団らん・くつろぎの起居様式と希望の起居様式との関係＜小規模建売住宅＞

多くなる（表 16）。

広さは、各対象ともに 6 畳が多い。注文住宅では 8 畳前後の主寝室も多くなり、主として洋室が対応している。

## 2) 主寝室の洋式化の現状

図 26 にみるように、マンション、注文住宅、中規模分譲住宅の順にベッド化率が高い。マンションでは、3 割が主寝室をベッド化している。それに対し、規模的には変わらぬ小規模建売住宅ではベッドは少ない。これは、マンションの方が洋室の割合が多いことと、



上段：実数(人) 235人中  
下段：(%) (不明回答 6 人)  
円の面積はパーセントに比例

図 25 だんらん・くつろぎにおける起居様式  
・床形式の実態<マンション>

表 15 主寝室の広さ

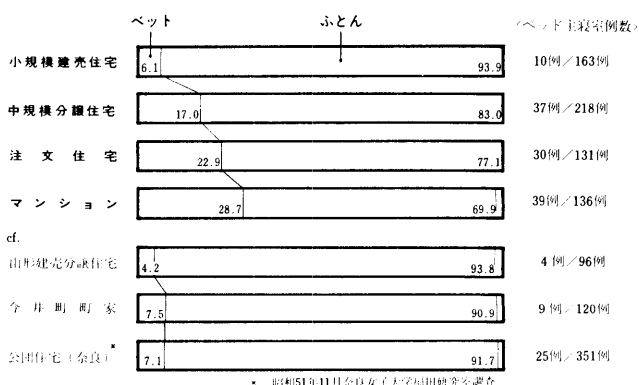
| 住宅階層別   | 4.5畳未満     | 4.5         | 6             | 7.5        | 8            | 9          | 10         | 11<br>15   | 15以上       | 合計             |
|---------|------------|-------------|---------------|------------|--------------|------------|------------|------------|------------|----------------|
| 小規模建売住宅 | 0          | 6<br>(3.6)  | 116<br>(69.5) | 1<br>(0.6) | 43<br>(25.7) | 1<br>(0.6) | 0          | 0          | 0          | 167<br>(100.0) |
| 中規模分譲住宅 | 1<br>(0.5) | 15<br>(6.7) | 169<br>(75.5) | 9<br>(4.0) | 30<br>(13.3) | 0          | 0          | 0          | 0          | 224<br>(100.0) |
| 注文住宅    | 1<br>(0.7) | 7<br>(5.3)  | 67<br>(50.4)  | 6<br>(4.6) | 42<br>(31.6) | 4<br>(3.0) | 4<br>(3.0) | 1<br>(0.7) | 1<br>(0.7) | 133<br>(100.0) |

(%)

居住者層の相違に拠っていると思われる。ところで、各住宅階層ごとに主人の年齢別にみると、どの住宅階層においても、20代の特に若い夫婦ほどベッドが多くみられる。ベッド化の傾向は、若い夫婦において顕著である(図 27)。建売分譲住宅では、供給プランは主寝室として畳室を考えているので、主寝室をベッド

表 16 主寝室の床仕上げ

| 住宅階層別   | 主寝室の床仕上げ |          |             |
|---------|----------|----------|-------------|
| 小規模建売住宅 | 和室       | 畳        | 160 (95.8)  |
|         | 洋室       | 板の間      | 3 (1.8)     |
|         |          | じゅうたん仕上げ | 4 (2.4)     |
|         | 計        |          | 167 (100.0) |
| 中規模分譲住宅 | 和室       | 畳        | 196 (87.5)  |
|         | 洋室       | 板の間      | 15 (6.7)    |
|         |          | じゅうたん仕上げ | 13 (5.8)    |
|         | 計        |          | 224 (100.0) |
| 注文住宅    | 和室       | 畳        | 104 (78.2)  |
|         | 洋室       | 板の間      | 16 (12.0)   |
|         |          | じゅうたん仕上げ | 13 (9.8)    |
|         | 計        |          | 133 (100.0) |



\* 昭和51年11月奈良女子大学附属研究発表調査

図 26 住宅階層別にみた主寝室のベッド化状況

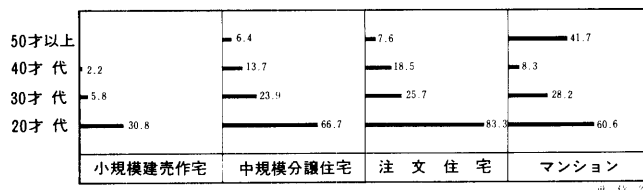


図 27 主人の年齢別にみた主寝室のベッド化傾向

化している例の中には、4.5～6畳の狭い洋室にベッドを持ち込んでまで主寝室の洋室化を図っている例が散見された。

図 28 は、主寝室の希望の起居様式と床形式の関係を示したものである。ふとんの場合は畳(じゅうたん)を敷かないが、ベッドの場合は板の間にじゅうたんが望まれている。紙面の関係上、マンション居住者の希望を示すだけにしているが、希望の出方も、現状のベッド化率の高い住宅階層の順に、現状よりもやや多くのベッド要求が出ている。とくに若い夫婦ではベッド化要求がかなり潜在している。また、後述のように、子供の就寝のベッド化がかなり進行し、ベッド育ちの人々が増加しつつある状況を考えると、今後、主寝室の洋式化は漸次進行していくことになろう。しかし、以

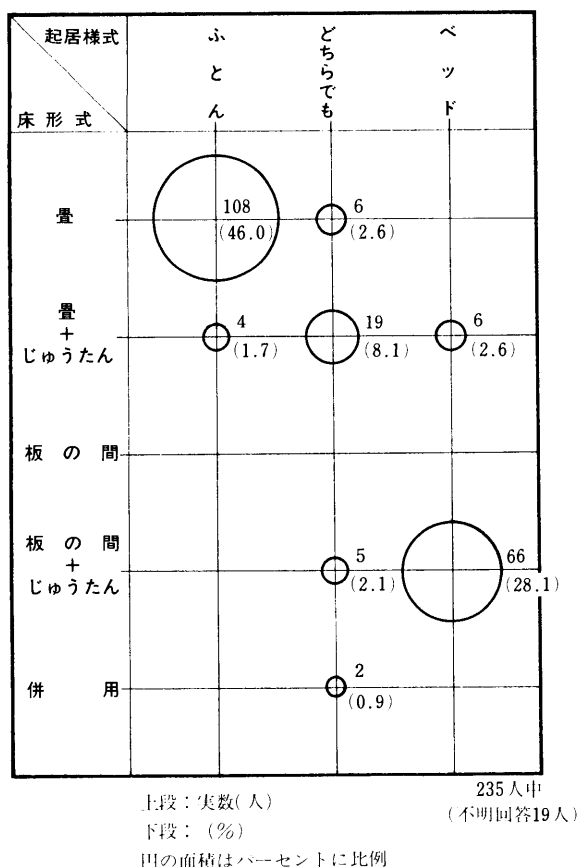


図 28 主人の就寝における希望の起居様式・床形式  
＜マンション＞

上のような、ベッド化の傾向に対し、ここで主寝室の洋式化に伴う諸問題を検討すると同時に、日本住居における主寝室のあり方を再検討しておこうと現在、研究継続中である。

#### (5) 子供室の洋室化

主寝室から子供の就寝が出ていく時期が、遅くとも、子供の年齢が 10 才位（小学校中学年）までに完了する傾向が認められる（研究継続中）。前述したが、供給プランとして、6 畳前後の広さで子供室を前提とした洋室が用意されている中規模分譲住宅では、子供室には、これら洋室からあてられていく。一方、小規模建売住宅では、供給プランの制約から、和室と洋室が半々となっている。居住者の好みの反映された注文住宅では、子供室の大半は洋室となっている。建売分譲住宅で、供給プランの制約上、子供室が和室になっている家では、洋室への変更希望が多く出ていた。

図 29 の起居様式の現状をみると、子供の勉強は、これら住宅階層においては、ほぼイス式化してきているといえる。寝床様式の状況は、注文住宅、中規模分譲住宅、マンションでは、かなりベッド化が進行しているといえる。各住宅階層ともに、小学校低学年よりベッド率が高くなり、中・高校生年代になると、さらにその比率

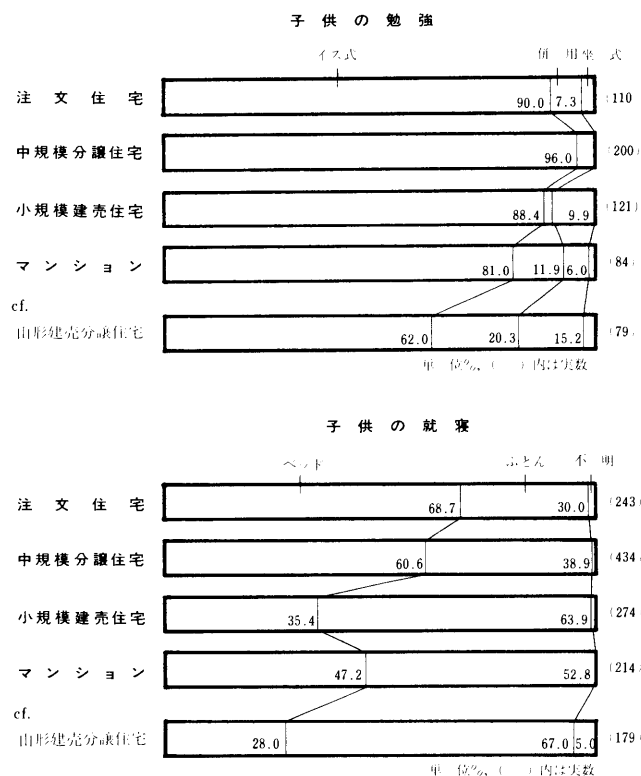


図 29 子供の勉強および子供の就寝における起居様式の現状 ＜住宅階層別＞

が高くなってくる。

次に、居住者の要求傾向を見ても（図 30 参照）、どの階層においても、同じように、イス式（ベッド）で板 + じゅうたんという要求が出ており、子供室の洋式化への志向傾向が強い。

#### (6) 老人室について

今回対象の住宅階層では、核家族が大半で、老人のいる世代家族の割合は少なかったが、老人のいる（老人一人の場合が多い）家を取り出して、簡単に述べておく。

老人室には、和室があてられており、寝床様式は、大半がふとんである。

居住者の志向傾向を図 31（中規模分譲住宅の場合）に示しておくが、どの階層とも畳にふとんが大勢である。しかし、図 32 にみるように、老人自らの要求としては、ベッドにしたいという要求が、かなり出ていることは注目される。マンション（図 27）で 50 才以上の夫婦で、ベッドが増加していることは興味深い。起居動作がらく、ふとんの後始末がらくというような点から、ベッドが好まれていると考えられるが、これら諸点については研究継続中である。

#### (7) 客間と応接室

前述したように、必要室がとられたあと、室数に余裕のある家では、客間（畳室）がとられており、室数に余

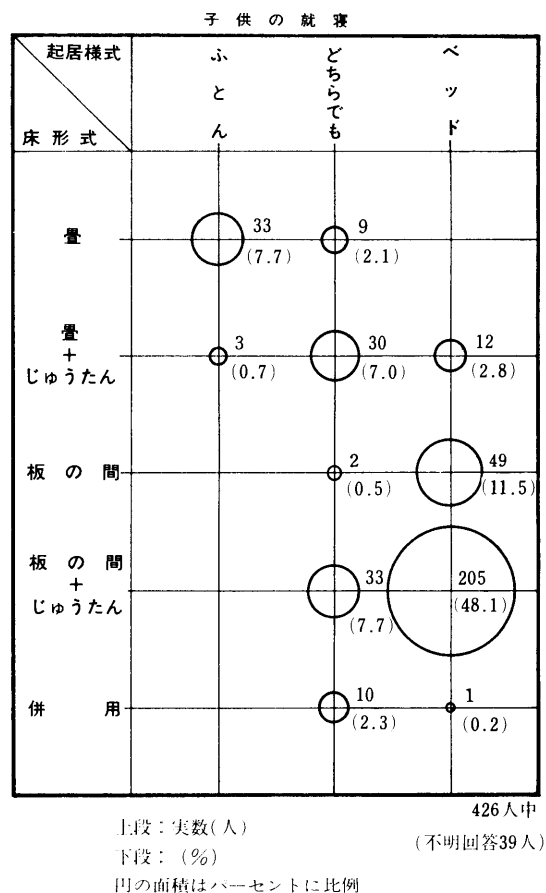
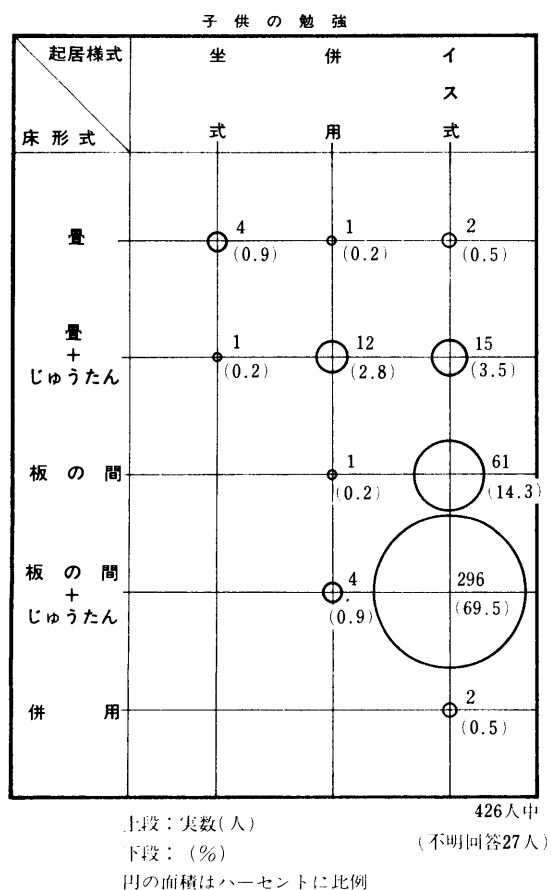


図 30 子供の勉強・就寝における希望の起居様式・床形式＜中規模分譲住宅＞

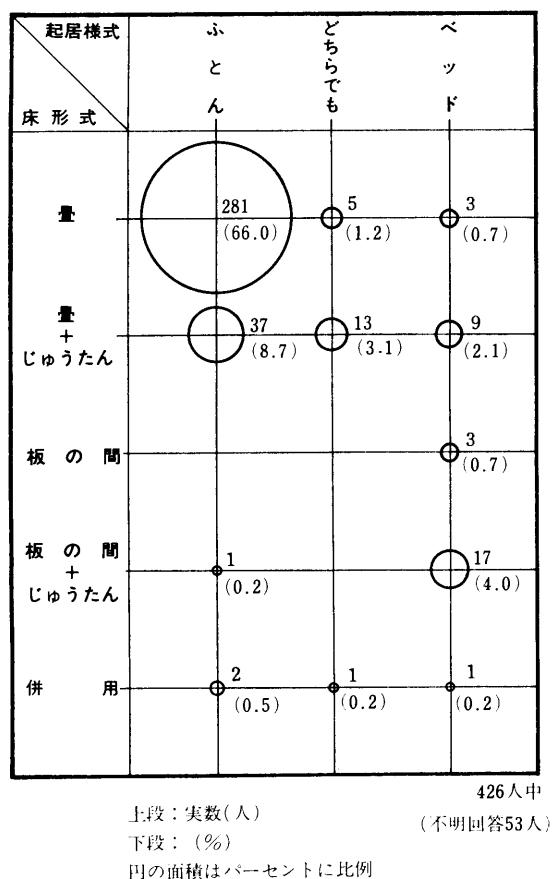


図 31 老人の就寝における希望の起居様式・床形式＜中規模分譲住宅＞

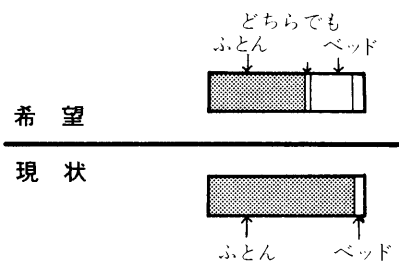


図 32 老人の寝床様式の現状と希望

裕のない家では、夫婦寝室（畳室）や居間で客間的行為が兼ねられる。

客の応接に対しては、Lや応接室でなされるが、客の食事・就寝となると当然、畳室があてられることが多くなる（図 33）。

図 34 の要求傾向を見ると、中規模分譲住宅の場合を示したが、どの階層ともによく似た傾向であり、客の応接は、板の間+じゅうたんでイス式、客の食事や就寝については、畳で坐式（ふとん）という傾向が示されている。客の応接には、Lや応接室のイスなどで済まされるわけであるが、多人数の客、客種、泊り客には和室が必要とされている。部屋の増加希望として、客間のない家では、和室の客間要求が多く表明されていた。

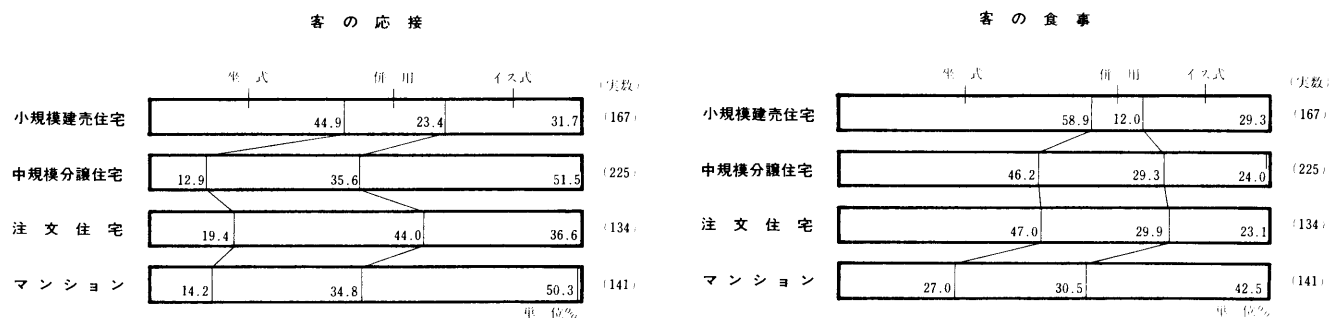


図 33 客の応接・客の食事における起居様式の現状<住宅階層別>

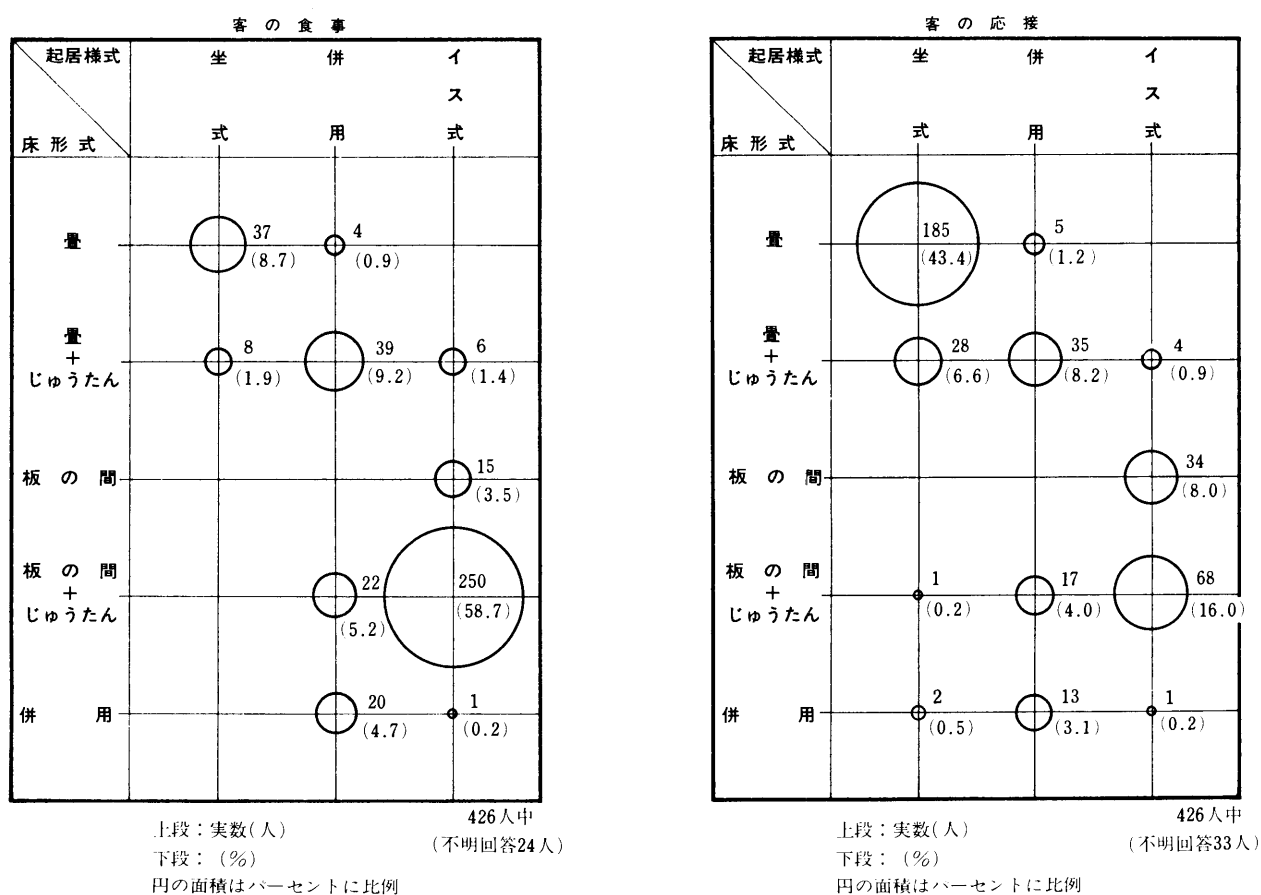


図 34 客の応接における希望の起居様式・床形式<中規模分譲住宅>

#### (8) 家事行為に使われる畳室

— 繕いもの・洗濯物をたたむ・アイロンかけ—

繕いもの、洗濯物をたたむ、アイロンかけなどの諸家事行為に対して、独立した家事室や家事コーナーが、対象住宅規模程度ではとられることは少ない。そこで、畳の部屋が他の生活行為と兼用して使われることになる。洗濯物をたたむことなどは、板床・じゅうたん床よりは、なにか清浄感が感じられる畳床の上でたたまれることが多い。また、大きな洗濯物を広げたりするには、比較的ものが置かれていない畳室が便利に使われている。アイロンかけも同様の傾向であるが、繕いものについては、LのいすやDKのいすも使われる。家事行為に使われる室種は、

畳の居間がある家では、そこで行なわれることが最も多い。畳の居間がない家では、Lも使われるが、畳室の主寝室や客間が使われることが多い。これら諸家事行為については、部屋として機能未分化、プラン上の体系的な取り扱われ方もまだ不明なところも多く、現状では、畳室で行なわれていることが多い。今後、主寝室がベッド化され、機能固定化された場合、現在、畳の主寝室で転用利用されていた家事行為をどうするかなど考えるべきところを多く残している(研究継続中)。

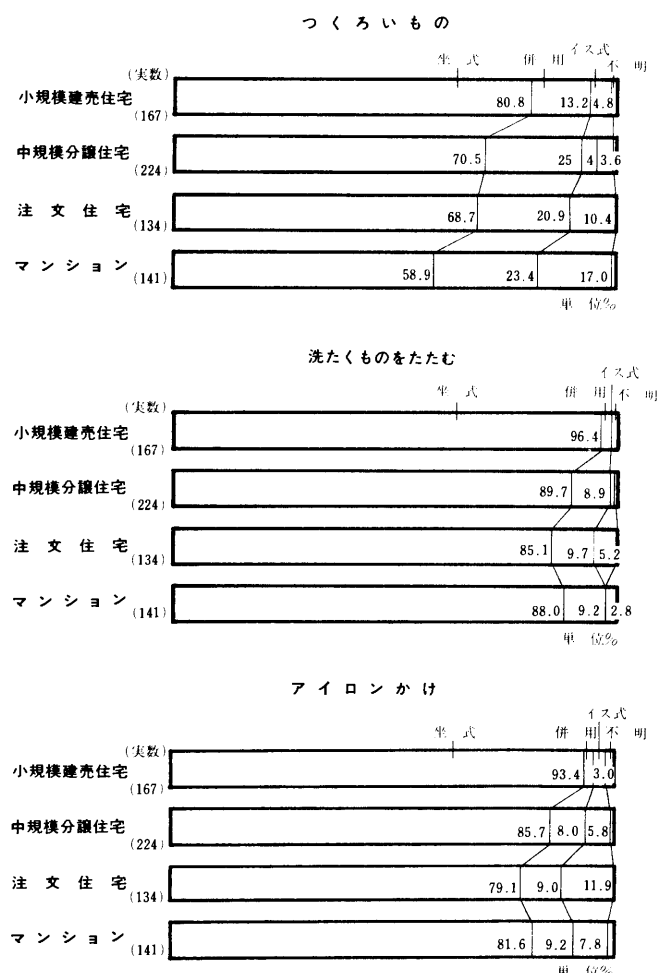


図 35 つくろいもの・洗たくものをたたむ・アイロンかけにおける起居様式の現状 <住宅階層別>

### 2-3 居住者の畳に対する指向性

居住者は床面および起居様式に対して意識的には何を求めているか探ろうとしたのが本論であるが、室機能別にみた起居様式等への要求は前章で述べてあるので、ここではとくに畳についてのみ地域的比較をまじえながら紹介しておく。

### (1) 畳に対する総合的評価

望む室数および愛着度の2点について紹介すると図 36 のように示される。予想していたより要求度はつよく、「2室以上」に7割以上が集中している。地域的ないし住宅階層別にみると、山形方面では更に高い比率を占め、とくに農家住宅では9割近い。また逆に大都市地域のマンション居住者層では著しく低率になり、むしろ「少くとも1室」程度が多くなっていることは特徴的である。

畳への愛着の感じ方についても、上記と似た傾向がうかがえる。畳を捨てがたいものと感じている傾向は、全体的にみて7～9割を占めているが、マンションの場合は「愛着がない」「どちらともいえない」ものをあわせると約3割は、意識的にも畳はなれの傾向が感じられる(図 37)。

### (2) 床材としての畳の評価

これについて、感覚、性能、維持管理、起居様式との関係などの各側面についての評価をみると図 38 のような結果をえる。(地域的比較の意味も少なく図も繁雑になるので中規模分譲のケースで紹介する)。

感覚面ではやはり「いぐさ」そのものの感触や色感に好感をもつことが多く、この点については短所をあげるものがない。

性能については大体常識通りであるが、保温・吸湿性については、たとえ板床にじゅうたんを敷いても、畳にじゅうたん敷にはまさらないことが居住者によって語られている。

維持管理面でも長短それぞれあるが、最近若年層では畳表のうらがえ・取かえ等の知識不足、畳価格の高とうの現実などが、短所に関する評価にあらわれている。

起居様式に関連しては、短所として「椅子生活にあわない」としながらも、「自由な姿勢がとれる」点に高い評価が出ている。この評価は勿論、室の性格によっても異なってくるが、家族団らんの居間などについて、最も

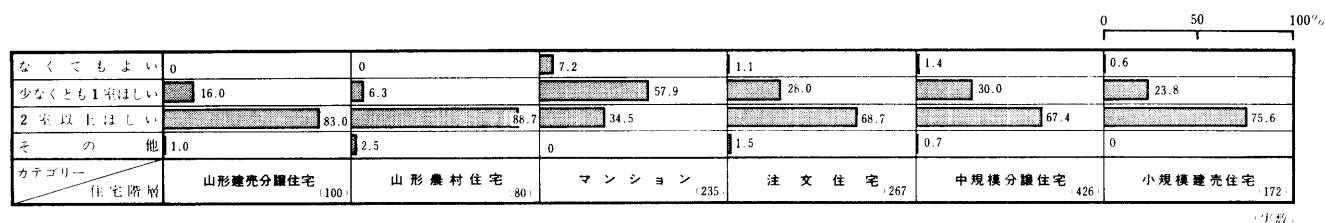


図 36 畳室の要求

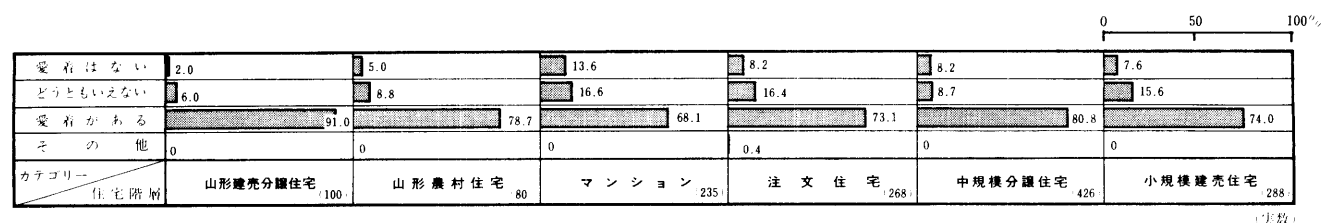


図 37 畳への愛着度

問題になる点であろう。他章でふれるように居間では、坐・椅子併用、畳床の要望が案外多いのである。

### (3) 畳室のよさについて

床材としてだけでなく、室空間つまり和室についての評価であるが、これも地域的にそれほどきわだった差はない。心理面、機能面、特定の伝統的生活慣習との関連などにわけて考えてみたが、よくいわれるように「心の安らぎ」「落ち着き」などに和室の評価が高い。一方、室の転用性、融通性などに依然として高い評価が与えられているが、住宅階層の広狭に左右されていることでもないところを見ると、従来の傾向で評価しているのだろうか。

## Ⅲ 床面様式・起居様式の将来への展望と問題点

住生活における以上のような生活様式の展望は、今回の調査研究だけで断定的にいうことはむづかしい、あるいは本来いえないことかもしれない。客観的条件や主体的な意志の変化によってかわりうるからである。しかし調査研究でつかみえた傾向の中から、あえて考察してみよう。

生産面についての細部の問題はその章でふれたが、全体的に概観してその畳生産下降傾向は否めない。しかしその急激な衰退によって住宅の床面様式が急速な変貌を強いられていく傾向は感じられない。畳の生産・供給について種々の代替手段が努力されているからである。

畳表・いぐさについては、化学製品の代替は不成功におわったとしても、生産地の転換により何とか生産量を支えているのが現状である。

畳床の藁に関しては、農業構造の変貌に由来するだけに、より深刻であるが、この方は「化学床」という代用品が、居住者に受入れられる可能性をもっている。

しかし以上の生産面の動向が、日本の住宅における畳床の比率を復元する要因となるとは考えられない。なるほど居住者の意識としての「畳礼讃」傾向は、思ったより熱烈に出されている。また従来しばしば耳にする「1室だけは」という畳室への願望が、2～3室に及ぶという現象も見られるが、それらは室種として特定化される傾向がある。たとえば客室、予備室、主寝室、少いが老人室。

その主寝室も若い結婚適齢世代に対する寝床調査ではベッド化の方向がようやく出ている（昭和53年7月調査）

結局、現代衣生活は大方洋服化してしまったが、和服は普段着としてでなく伝統美を觀賞、誇示する特化された外装として用いられ、それを支える生産も文化財的高級化を見せている。

面積の限定や実用性を要求される住宅はそれほどでな

くても、丁度ウールの着物にも似て、「和風」の趣味性を求める室として「特化」されていくのではないか。

このような推測は、意識において心理的安定と伝統的和風のたゞずまいにおいて、つよい畳への執着を示す反面、事実において「洋風化」傾向が進捗しつつある現象から考えられる。

「洋室化」の発展経過を、時代的に図式的に述べると、

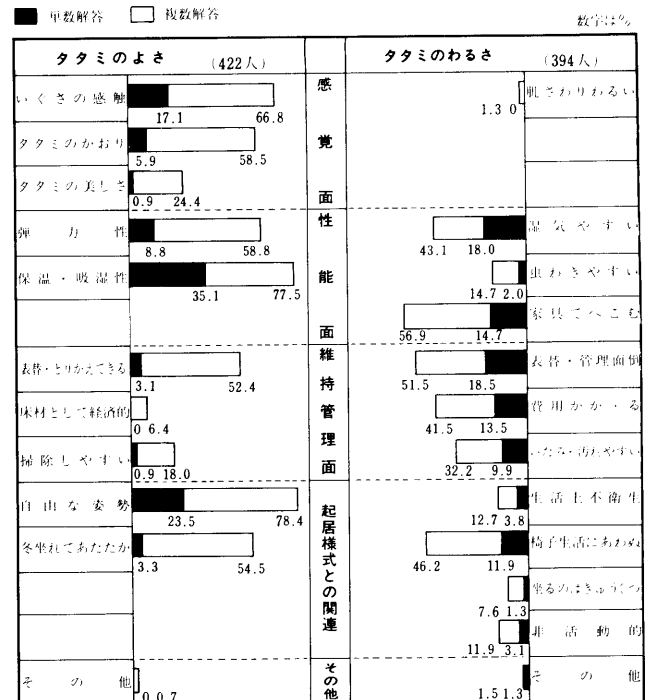


図 38 たたみの長所・短所の評価

応接室→〔子供の勉強机・イス〕→食事室〔DK〕→子供室→リビングルーム→夫婦寝室、のような順に発展してきている。明治から戦前までは、家族の生活と無関係の応接室までで留まっていたといつてよい。もっとも子供の勉強机は椅子式になりつつあったが、床は畳が主であった。

戦後、板床に椅子式の様式は、まず食事室にはじまり、ついでリビング、子供室へと急速に伸びてきた。あと基本的な室種で残るところは、主寝室のみとなったが、これも本調査の中でも若年～中年層の夫婦で「ベッド化」が進行しつつあるようである。

「ベッド化」自体様々な問題ををはらんでおり、また以上の傾向はある住宅階層に対応した問題ではあるが、大都市のかなり広範な住宅階層の住様式傾向になりつつあるといえる。

これらの住生活の中で、床面様式と起居様式との対応つまり畳ないし板床と「坐る」か「腰かける」かのあり方について、やゝ注目すべきスタイルがある。

それは「畳にじゅうたんを敷く傾向」といわゆる「じゅうたん仕上げ」の床面がかなり目立ってみられること

である。

室種として居間に多い。供給プランに居間を予想した畳室があることもその故であるが、注文プランにもそれがある。たゞそしてその場合は坐式の起居様式がとられているが、じゅうたんが多く使用されている。

じゅうたんの使用は「畳の保護」「坐面の保温」の理由もあげられているが、華やかな雰囲気と新しい自由な起居様式への階程であるともいえる。

このような住様式に対して、「畳＋じゅうたん」は「じゅうたん仕上げ」より好まれている。理由は「保温性」と足下を感じるショックの軟かさであるが、こういう所に座面としてでなく床材としての畳の長所と認識が示されている。またそれは、靴に対応するものではなく、素足の履床様式に対応するものとして起居様式の如何を問わず優れているのかもしれない。

消長が問題になる畳、徐々に伸びつつある板床やじゅうたん等、床面の形式と起居様式の動向から、住宅プランへの展望を試みたのであるが、以上のことが、日本の何処にでもあてはまることでは勿論ない。

同じ都市近郊の中流住宅でも、地域的にひじょうに異なる。大都市地域でない地方都市では、畳室の比重は実際上も意識上も重くみられている。また、大都市近郊でも伝統的形態を留める旧街区の住宅一たとえば町家では、同様の傾向がみられる。

しかしこれらの住宅でも、応接室、食事室に関しては「洋室化」の傾向がみられ、地域差を保ちながらも徐々に変化しつつあることは否めない。

#### 研究組織

|       |                |
|-------|----------------|
| 研究主査  | 扇田 信（奈良女子大学教授） |
| 研究委員  | 西村 一朗（同 上 助教授） |
| 同上    | 今井 範子（同 上 助手）  |
| 研究協力者 | 金子 幸子（山形大学助教授） |